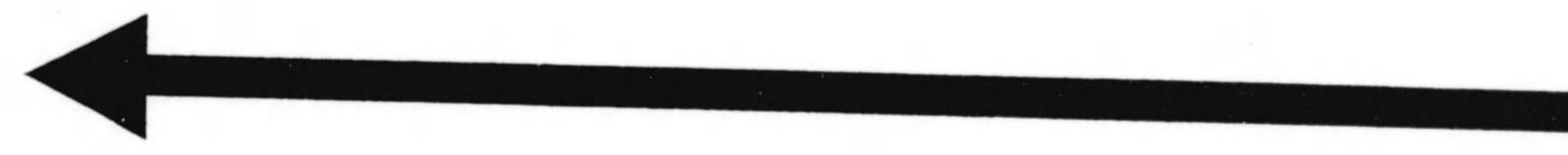




361
43

始



161
45

松
風
集

特232
111



頌
昭
如
集



序

昭和六年に昭和集を發刊して世評を博したのに鑒み、今回は其續編を公刊したのである。世に新派と稱する歌人ありて自己の作は悉く天下に發表するを誇りとし、俗に云ふ猫も杓子も出版して居る。然るに舊派の歌人には其作を刊行する人はめつたにない、大方は死後に其子孫が出版する習慣になつて居る。其歌集に若し書損などあり又は後日訂正せんとするものあつてもそれは及ばない。死後に出版する程ならば何故に生前に編輯して訂正もし補修もして完全のものご成さない

であらう。編者は常にこれを患ふるものである。秀逸佳調は純然たる歌詠みの専有物ではない、却て素人我々の歌にこそ快心の作は往々にして見出さるゝところが少くない。されば此一小冊子中にも無数の佳作あることは編者の責任を以て公證する處である。若しそれ初學の人の座右に置かば、他山の石となりて大に成果あるべきを信ずるものである。

昭和九年九月

五城 識す

荒金の土の中にも磨きなは

玉となるへき石はありけり

凡例

- 一 各部門の始めに御歌所寄人の歌一首掲載せり。
- 一 本集は各自より特に秀句を五首宛募集し其中より精撰したるものを採録したり。
- 一 本集は主として原作を尊重し成るべく筆を加ふることを避けたりと雖も補筆佳をなすべき少數の歌に對しては多少朱を加へたるものあり尙題意と歌と相反するもの又は類似の題の多きものは文字を改めたり。
- 一 一人二首を最少限度とし三首又は四首採録したるもあり

これらは編輯者主觀的に佳作と認めたる結果なり。

尙新年及歳暮の歌はすべて冬の部に編入せり。

一 排列の順序は前後錯雜したる所もあり殊に雜の部は甚だしく交錯して區別に意義なからしめたるもの少からず雜には一定の標準なきと排列編輯濟後到着したる詠草の比較的多かりし爲なり。

一 編輯完了後到着の分は全部謝絶せり不惡御了承を乞ふ。

目次

春の部……………自 一頁 至 五一頁

夏の部……………自 五二頁 至 一〇八頁

秋の部……………自 一〇九頁 至 一六五頁

冬の部……………自 一六六頁 至 二二三頁

雜の部……………自 二三三頁 至 二九一頁

續昭和集

大町五城編輯

春之部

氷解 東京千葉胤明

目に見えぬはるのひかりは谷かけの氷さへこそ残さしりけれ

汐干狩 同 鳥野幸次

稻毛の海ひかたのとかに霞む日を少女かともはむれてあされり

花盛 同 武島又次郎

三宅坂なみ木のさくら咲くころは花の洞ゆくひともくるまも

春門 同 遠山英一

夕まくれ門に人まつをくるまのほろの上白く花ちりかゝる

春之部

餘寒月

今は春こもりてのみもあるへしや雪のはれたる月をみてこむ

金子元臣

春行路

櫻田のつゝみの柳めくまねとかせやはらかに大路はるめく

加藤義清

夜春雨

燈火のかけもうるほふ心地して雨なつかしき春のよはかな

外山且正

立春

さしやなき眉つくりしてうつりけり春たつ池を水かゝみにて

兵庫竹内方山

豆まきて鬼おひはらふ門邊より今年の春はたちそめにけり

群馬土屋元次

はるたつや庭のかけひの氷すらけさ音たてゝなかれそめけり

静岡岡武山春野

都立春

今朝みれは大内山はかすむなり雲の上にもはるはたつらし

宮崎時任正張

うすかすみ大内山にたちそめてちまたをわたる春のはつかせ
池平三

春立つ朝

けさみれは秩父遠山かすみけりはるは都をあとまはしして

東京藁科松伯

初春

池の面に春の姿をまつみよとさゝなみたてゝ緋鯉ひれふる

岡山駒井縫次

早春

野邊の雪むらさきえそめて青柳のめたつは春のけしきなりけり

福岡岸壽美雄

世の春を車につみてふれなから芭蕉の辻を花うりのゆく

宮城小林こさん

田家早春

藪かけのわらやの門はさく梅のはなの香よりや春はたつらむ

新潟和田茂幹

水知春

のとかなる岸の柳のかけみえて春のいろそふ水のおもかな

茨城郡司篤則

柳知春

里川の水もぬるみて青柳のいとよりなひく春のかせかな

汀柳

見なれたる小舟なき日は青柳のいともさひしき川つゝみかな

隣家柳

吹く風をみとりになしてさしなみの隣の柳もえいてにけり

行路柳

ゆきかよふ人の心もつなくらむなひくちまたの青柳のいと

道柳

ひろ野原みちをひらきて村人かなみ木に植うる猫柳かな

立春霞

いく人の心をはるにひくものは今朝たちそむる霞なるらん

春霞

裏山もけさはかすみ隔たりてきちのこゑのみ近くきこゆる

朝鮮杉

四本一

宮城一

迫健治

福岡内

山小源次

大阪岩

井健之亟

東京鈴

木隆之助

福島萩

野常子

静岡菅

沼愛子

宮城戸

田淑子

山口三

谷玄珠

茨城大

貫隆正

霞

山口中

島光子

朝霞

福岡今

井三郎

大阪田

口このゑ

東京掛

川由起子

あまかやの屋根のかきからかきろひにもえて棚ひく朝霞かな

上野山花のたよりもちかいらし朝な／＼にかすみたなひく 同 尾 澤 璋 子

牛追ひてかへるわらへの草ふえも霞にきゆる春のゆふくれ 大 阪 乙 咩 田 鶴 子

きのふけふ八重に霞のたちこめて目近き山も遠さかりゆく 福 島 齊 藤 與 之 助

初瀬川なかるゝ水にはるみえてけさ霞みけり三輪の神山 奈 良 稻 田 主 麿

岩はしる早瀬のおとは聞ゆれとかすみて見えぬ溪のかけはし 富 山 名 苗 織 平

けさみれは霞のころもよそほひてのとかなり 岩 手 宮 澤 彌 次 郎

いたゝきをうすくのこして鳥海山たちかくしたる春霞かな 秋 田 堀 よ ね 子

霞隔山

遠山霞 熊 本 本 田 行 藏

たちのぼる野火の烟もなひきあひてほのかに霞む阿蘇の遠山 茨 城 長 沼 成 美

筑波山さやかにみえて水ぬるむ潮來出島はかすみこめたり 愛 知 土 川 順 子

海上霞 茨 城 布 川 順 子

満汐の岩ねこすおとしつまりてかすみたなひく知多の入海 茨 城 布 施 正 次

鹿島灘なみの音さへやはらさてたなひきわたる春かすみかな 東 京 松 本 美 徳

胡蝶まひ小鳥なく野を一刷毛にひきわたしたる春霞かな 福 島 武 藤 重 雄

ひはり毛も月毛もわかすなりにけり駒の遊へる野邊は霞みて 神 奈 川 日 高 數 子

茅ヶ崎のさとの桃畑松林そのいろ／＼にかすみたなひく

名所霞

青かはら松の木の間ほのみえて千代田の城に霞たなひく

岡山 浅

羽春之

箱崎や千代の松原かせたえてかすみかゝれり海のなかみち

福岡 河

野修造

ゆく汽車のまに繪巻をくりひろけかすみかゝれり白鷺の城

兵庫 野

口喜能惠

あしたかも静機山も富士のねの雪をのこしてけさはかすみぬ

初霞何方

静岡 林

文昌

薄けれと一刷毛ひきて山もとの霞そ春のけしきみせたる

霞薄

東京 山

岸静枝

玉里の梅のさかりのたより來ぬあすはたつねん友をさそひて

梅便

鹿兒島 本

田親清

書き流す文字すらかをる心地せり梅さくといふ友のみたより

富山 田

口俵太郎

早春梅花

春霞けさは野山にたちそめてのきはに梅の花もさきけり

福島 菊

地守義

尋梅

福岡 辻

光子

雪とけの道のなやみも忘れけりたつぬる梅を尋ねおぼせて

探梅

群馬 村

田宗永

手折りたるつとの一枝肩にして梅か香こほすみやひをや誰

梅林

大阪 寒

川文平

右左みちはわかれていつかたもはなの香にゑふ梅はやしかな

梅

千葉 關

野義三郎

霜柱くつるゝ庭のひおもてに咲きそめにけり梅のひとえたり

東京 高

山良寛

ふく風も日にやはらきてわか庭の梅か香よりそ春のこほるゝ

田家梅

千葉 松

原翁馬

こはるれはこはるゝまゝにうなつきて田人のたをる梅の一枝

月前梅

梅の花ささそめしよりさむけれと月影ふまぬ夜はなかりけり
滋賀 吉田 虎之助

三重 大川 親直

照る月を梢にかけてさく花のこゝろも高し野邊の梅か枝

梅薫風

岩手 齋藤 忠兵衛

書をよむまとの風すら匂ふかなのきはの梅の咲きそめしより

宮崎 龍岡 清子

蔭の薫あさる雪消の藪かけにうめか香すなり風のまに〜

廣島 田村 ため子

朝風の清くかよひてちりはらふ窓のうちまで梅かをるなり

東京 務川 眞佐榮

うたまとゐこの家としりぬ彼方より梅が香清き風のふきして

隣家梅

三重 福田 豊城

咲きそめしとなりの庭の梅の花かをりは垣をへたてさりけり

群馬 羽鳥 榮治郎

垣こしにさけるとなりの梅の花あるしにこひて一枝をらまし

梅花盛

福島 佐藤 由之助

鶯のこゑするかたにきてみれば何處も梅のさかりなりけり

社頭梅

三重 石野 たづ子

梅か香のにはほはぬかたもなかりけり北野の宮のかみの御庭は

曙梅

福岡 永田 政吉

鶯もまた夢さめぬあけほの〜まともる風に梅かをるなり

梅花夜薫

東京 友田 效三

花見ひとたのみし月はかたひきてうめか香のみそ窓に残れる

記念樹

茨城 横須賀 倉太郎

皇軍の勝を祝ひて植ゑおきし梅のはつはなかくはしきかな

梅花によせて

臺灣 久保 一朗

春くれは高砂島の旅ねにもほしきは梅の花にそありける

水邊梅

水車ゆるくめくれる日あたりに老木の梅の花さかりなる

餘寒

薄かすみ日のみえつるをたちまちに雪けにかへす如月の空

餘寒風

山の端はかすみながらにさえかへり春としもなき風の冷さ

餘寒月

初午のまつりすきても稻荷山つきかけさむき杉の下みち

春雪

梅は咲きやなきは青むきさらきのかせさえかへり泡雪のふる

ものゝふのたむろをいてゝのる駒のあふみにかゝる春の泡雪

やふかけのこぼれ椿にしらくとあわゆきふりて寒き春かな

東京吉村重子

福島慶徳政子

富山米林徳次郎

愛知葛谷浩甫

宮城馬淵誠敬

京都竹内幾子

愛媛石村清一

春寒

さえかへりのきはの梅のふくらめるつほみの如き霞ふるなり

梅かをる里わなからにさえかへり酒あたゝむる家そにきはふ

春雨寒

ふくらめる梅のつほみやさむからん氷るはかりの春雨そふる

山残雪

かすみたつ遠山松のしたかけは春日やうとき雪の残れる

嶺残雪

春風のいたりいたらぬ方なれやのこりのこらぬみねの白雪

鶯

みちのへにさわらひもえて春ふかき御さゝき山に鶯のなく

耶馬の里はるの旅路にうれしきは谷ことにきくうくひすの聲

大阪山住今子

兵庫植松義太郎

秋田柴田金治郎

旅順今村龍城

福岡十時吉男

兵庫藤原象二

大分溝口康繼

つとめなき身こそやすけれ朝な／＼來鳴く鶯ねやにき／＼つゝ
高知野 山口元七

歌に繪にかきつくされぬのとけさをうたひいてたる鶯の聲
三重横山 宗顯

うた心そいりおこしてけさもまた庭の柳にうくひすのなく
東京野村 鹿子

訪ね來しみやこの友と木の芽にて語らひ居れば鶯のなく
新潟 板垣五左衛門

わかやとの庭つゝきなるたかむらにあかつきかけて鶯のなく
群馬星野 竹男

ほからかにあしたの庭を歌にしてなく鶯のこゑのけたかさ
三重 藤井鐵城

あけはなつ朝のまとうくひすの人なれてなく聲そなつかし
佐賀 中野萬龜子

夕鶯

うくひすのなくねほのかに聞ゆなりかすみにくる、岡の松原
神奈川 大口善音

山家鶯

梅かをる庭の笥のまし水にのとうるほしてうくひすのなく
石川 森雅枝子

山寺鶯

あか井くむ人もまれなるやまてらは鶯のねもさひしかりけり
福島 安藤孝寛

社頭鶯

御社につゝく松原うちかすみあした静けくうくひすのなく
山口 安井寛

窓前鶯

窓の外の梅のかをりやさそひけんけふもきてなく庭の鶯
長野 野田次尾

鶯

ゆかりなき人もとひ來る梅林なとうくひすはうとくなりけむ
熊本 武藤かきは

待鶯

筑山の梅のさかりのすきぬまと日々待たるうくひすの聲
島根 堀龜五郎

岡山横畑圭邦

春されはまたぬ友さへとひくるをなと鶯の來なかさるらむ

若草 東京織田みを子

ふくかせに日うけのかきね霜とけて春日のとかにもゆる若草

大地震にくえたる跡もみえぬまで若草しける伊豆の山道

静岡梶熨斗三郎

こ犬とち心地よけにもたはれあふ霞む廣野のわかくさの上に

大分藤永宣義

風にちる花をかつきて日たまりの垣根にもゆるはるの若草

山口伊藤勘治郎

若菜 宮崎野村郁子

かきろひに春あたゝかみ雪とけて根芹つむ子のかけ長閑なり

春草 岐阜濫谷玉恵子

雪さえしまきの垣根のつぼすみれ一株ながら春めきにけり

大阪寒川文平

牛のせにかけろひ見えて淀川の堤みなからわかくさのいろ

茨城豊田英雄子

里人にふまれながらも生ひいて、春にそむかぬ野への若草

行路春草 岡山四十塚圓十郎

道のへの野焼のあとを青くしてもえいてにけり春のわかくさ

道若草 山口紀藤まさ子

みちのへに風あくる子ら群りてよもきの若芽ふみにしりたる

岡春草 京都竹村仲城

學ひ子の畫をかくむれもみゆるかな若草しける岡の見はらし

砌春草 千葉西周政次郎

のきしたにしきたる石の間より春をみせたる名なし若草

雨中若草 兵庫町尾たつ子み

春草漸青

山口熊

野潤教

あたゝかき春のひかりをものつから青める庭の小草にぞみる

雨中蛙

兵庫小

倉直子

春雨に散りてうかへる古池のはなをしわけてなく蛙かな

同太

田富子

櫻はなぬれて散りしくあさ澤に雨よろこひてかはつなくなり

蛙

東京篠

田時化雄

菜のはなはあめに流れて小山田のあせ越す水に蛙なくなり

夜蛙

大分百

留宅子

山吹のはなかけくらす古池のおほろ月夜にかはつなくなり

蛙なく

岩手沼

倉勇

風ぬるむちほろ月夜にうたおもふわれにまなひて蛙なくなり

若鮎

新潟齋

藤鍾太郎

はやさせを三つ四つのほる若鮎のうろこさやかにみゆる夕暮

すみれ

東京柴

崎千枝子

春の日の思ひ出にせむのへにつむこの花すみれ書にはさみて

谷蕨

熊本稗

方幸子

もえいて、春の光にめくまれぬ谷間の蕨あはれやせたり

春雨

山口西

村右策

梅のさく庭をとひくる人もなしのきはさひしく雨のふる日は

春の夜の雨

東京川

村むら子

書よめと歌を思へとねむけのみもよふしやすき春の夜の雨

湯けのたつ谷

福島秋

月まし子

湯けのたつ谷はかすみて東山からかさいはにはるさめのふる

春の心

大分芥

川澄子

のとかなる春の心を草に木にみせてしつけき雨けふるなり

春雨のふり

石川近

江政子

春雨のふりにし日より庭の梅めくみにぬれて咲きいてにけり

むら山の雪をあらひてそめかへすみとりの雨の日日につしきぬ
島根堀 龜五郎

鶯の初音ぬらしてこのあさけ霞むかた野にはるさめのふる
青森駒 嶺賢治

ものうけに聲くもらせてかはつ鳴く隴夜ふけて雨となりぬる
奈良長薄 木昇

炭をやくけふりなかれてうちかすむ山しつかにも春雨のふる
群馬馬木 暮好文

霜よけをとりはらひたる芍薬のあかき芽にふる春の雨かな
富山中 川幸作

春雨のあやにくふりて思ひたつ花見ころのはれぬ朝かな
東京坂 元要介

花蔭に火をともさせてありたてはいつしか雨のふる夜なりけり
三重中 春花

鶯の花のねくらやいかならむふけゆく夜半に春雨そふる
山形田 澤富子

東山たなひくかすみいつしかも花のみやこの雨となりぬる
東京川 畑徹志

さわかしき大路ともなし春雨に並木のやなきけふるあしたは
同種 野信子

こゝかして残りし雪をみな消ちてのとかにふれるのへの春雨
石川櫻 井貞

葉につきし土を流して若草にみとりをそふる春のあめかな
三重川 邊彌三郎

春の日のせたの長橋うちみれはなかはかすみて小雨けふれる
神奈川 専修信立

春雨は橋をぬらしておとつれぬ花のつかひもはやわたりこむ
秋田藤 井重彬

宇治橋にたちてあふけは神路山かすみとみしは春雨にして
三重 福井 太男

舟春雨 兵庫 川越 陸子

糸竹のしらへをのせてかへりゆくはなみの舟に雨けふるなり
同 山本 小四郎

春雨静 愛知 坂井 田實弘

たゝひとつ白玉椿花おちておとさひしくもはるのあめふる
愛知 坂井 田實弘

こゝちよき花見かへりよ春雨の音を小傘にかろくきつゝ
兵庫 内藤 榮昭

春雨夜静 鹿兒島 四本 道邦

さわかしき人は歸りてくれわたる花の廣野にはるさめのふる
靜岡 荒川 常則

鉄もて茶をかるみ代となりけりわさは日毎に人手はふきて
雲雀なくかすみの野邊と少女等の茶摘のうたもはるさひにけり

茶摘 長野 後藤 金一郎

新茶 佐賀 木島 繁太郎

かせかをるすきやの中に手つくりの新木芽煮て啜るたのしさ
三重 坂倉 廣生

早春風 さえかへり雪けの風にはつうまの幟はためくうふすなのもり
大阪 巨摩 峰春

初春風 西の海の外つ國までわたらんわが大御代の春のはつかせ
兵庫 鈴木 よね子

春風 少女子のつみくさをしてかへるさを家まておくる野邊の春風
奈良 眞薄 木昇

長々のいたつき癒えてむすほれしこゝろも春の風にとけにき
三重 重堤 元道

いかのほりそらに霞みてすくなさく尾張大野に春かせそふく

社頭春風

東京 佐藤秀助

神まつる彌宜の狩衣ゆるやかにひるかへしつゝ春風の吹く

野春風

同 柴崎千枝子

次々にたにほゝのみのとふみえて春ふくるのにかろき風吹く

春風解氷

同 野邊地慶治

潮路さへとさすこほりもはるかせにとけてにきはふ北の港江

氷初解

茨城 富永春吉

わかにはのかけひの氷とけぬらむ池にしたゝる水のおとしぬ

雪解

岡山 竹内軍兵衛

やまかけのみゆきはとけて棚畑の麥のいろにも春は見えけり

秋田

土谷貞之助

吾妹子かをものゝしろにひめおきししら菜もみえて雪そ消えたる

春不遍

大阪 乙咩田鶴子

新ふみに花のたよりは見しかとも春またおそきかけとももの里

初春川

宮崎 濱田なほ子

朝霞にほひそむれと里川のわたしは寒くはるのかせ吹く

早春水

高知 近澤武男

春あさき里の小川にをとめ子かねせりをあらふ手ふさ赤しも

花便

愛知 石川たま子

なつかしき友はしらせぬ吉野山今日そ千本のはなの見頃と

朝鮮岡

壽作

なによりも嬉しかりけり生きのひて今年もうくる花の便りは

待花

徳島 石丸伸二

花さかはうたけせんとてけふもまた友のとひきて語りあひつゝ

京都多

氣巖伯

今日や咲くあすや匂ふとおりたちて庭の櫻をみぬ日なかりき

花

東京 鈴木木咲子

隅田川つゝみのさくら五分さきのけふこそ花は見頃なりけれ

山 櫻

きこりのみ通ふ山路の櫻こそ世にうもれ木の花と云ふなれ

新潟 吉原 興吉

櫻

この枝を折るへからすの立札にけしきそきたる山櫻はな

東京 新井 徳之助

朽ちぬれと大和心の色みせてことしもさきぬ鉢のさくらは

三重 竹島 定吉

大君のみあとしたひしものゝふの惜しまれてちる山櫻かな

福岡 永野 巳之吉

あまりにも美しければこひてみむ賤かかきねの花のひとえた

大分 安倍 こま子

櫻 花

あらゝきをなかはかくして花の雲たちかくしたる峰の古寺

岡山 楠見 建太

花 盛

いつ方も花のさかりときゝつれと見んひまのなき我身なりけり

神奈川 鈴木 知恵子

山口 赤地 幾五郎

世のうさを忘れて一日ちりもせず咲きも残らぬ花をみしかな

兵庫 竹下 悦一郎

みよしのゝ吉野の山の花さかりにほへる雲やそらにかよはん

宮崎 山内 泰三

天地にみなさる春のひかりをはあつめてさける花さかりかな

岐阜 早山 田敦子

こゝかしこ花をもとめて人々のうかれてありく春のゝとけさ

愛知 安井 信次

あたまもるみいくさひとは故郷の花の盛もしらてすくらむ

千葉 荻野 政藏

ちりもせず咲きもおくれぬ山櫻花のさかりはけふとこそしれ

福岡 村上 上福次郎

なりはひにいとまなき身も面白き月の夜ころの花はみるかな

春 之 部

月前花

茨城吉

見

輝

照る月も心ありけにしはらくは花の梢をはなれさりけり

人酔花

富山長

原茂次郎

うま酒をくまさる人も多しことうきたちさわく花の下かけ

岐阜森

田芳子

うたふありをとるもありて櫻狩はなの色香に多ひもこそすれ

山口紀

藤織文

つゝしみて酒はくまねと吉野山花には酔多りみささきのもと

春花

愛媛二

宮泰子

咲きにほふ花に心やひかれけむくれても歸る人なかりけり

風前花

兵庫兒

島弘能

山櫻なこりはかりとなりけりちるもちらぬも風のまに／＼

行路花

三重小

林正雄

ささつく花をみかてらゆく旅はみちの遠きもおほえさりけり

雨中花

同

伊藤祐誠

一年に七日の春とさく花につれなくそしくけさの雨かな

熊本山

田愨

あまりにも花の姿のきよければあめも心をおきてふるらむ

雨後花

栃木森

森藏

蜜蜂の羽音きこえて雨はれし軒端のとかに花そにほへる

曉花

宮城笠

原良保

いかはかりしつけかるらん曉のかすみにねふる花のころは

朝花

茨城金

戸文雄

有明の月はかすみにかけ消えて花になりゆく春のあけほの

滋賀伊

藤保治郎

あさまたき人のみぬまにみつるかな霞にねふる花のすかたを

宮城山

田さと子

春雨の晴れしあしたの庭さくらさのよにまさる花のいろかな

里花

たつねくる人もまれなる山里の花のさかりのしつかなるかな

古城花

益夫の時めきし世のおもかけをとしふる城の花にみるかな

篝火にはえしむかしもしのはれて大手にのこる山さくらかな

霞中花

吉野山奥はかすみで見えねともかをるは花のさかりなるらむ

庭花

築山もまかきも花にうつもれて春のさちある庭そたのしき

名所花

人傳にきくさへこゝろうきたちぬ雲の上野の花のたよりは

富士のねも見えて美し朝日さすくもゐの庭の花の絶間に

吉田修子

和泉丈三郎

上野華子

東京兒玉猪熊

福井眞田一夫

茨城飯田信

東京松本美德

嵐山花

山の名は嵐とよへとさくら花うこかすほとのかせもなきかな

少林寺花見

よはひさへのふ心地せりあしたつちとせの山に櫻狩して

三里塚の花をみてよめる

何處までさきつゝくらむ山さくらゆくては花の雲はかりにて

谷花

鶯はさとわにいてし谷の戸を咲きとさしたるやまさくら花

島花

島山はみなから花に埋もれてゆたかによする春の朝なみ

花上風

いとほるゝことをさとりて春風もはなのうへには心おくらし

松間花

龜田山萬代かけてしけりたる松も春めくやまさくらはな

山口木

大分角

千葉筒井

兵庫前田

土居

同高橋

同松間

島根伊豫

春之部

部連

あき子

井貞子

田勝子

居英成

高橋光枝子

松間伊豫つる子

龜田山萬代

松のみともひし山にはるくれは櫻もさきて人の目をひく 愛知 山本 萬太郎

花交松 北海道 栗賀 祐之

花さそふ風のやとりの松そとはしらて櫻のたちまじりけむ 福岡 西川 績子

關址花 福岡 西川 績子

さくらはな匂ふもさひしいにしへのあともとめぬ刈萱の關 東京 木村 牧

花間灯 東京 木村 牧

電の火かけまはゆき上野山暗夜そはなは見るへかりける 千葉 羽生長 七郎

花下言志 千葉 羽生長 七郎

我身にもさくらのことくはな咲かは命なかきは願はさりけり 同 鈴木 徳次郎

ものゝふのこゝろに似たり櫻花開くも散るもうつくしくして 愛媛 佐藤 義道

對花言志 愛媛 佐藤 義道

山さくらむかしなからにほふ世に大和心のなそうつるらん

花漸散 宮城 上野 華子

神園をうつみつくし、櫻はな三日見ぬまに散りそめにけり 愛媛 前谷 きく子

落花 愛媛 前谷 きく子

石かめも花をかつきて遊ひけりみはしのかゝる神のみいけに 群馬 馬井 上重 徳

水上落花 群馬 馬井 上重 徳

門川にうなるら流すさゝ舟の重荷となりてちるさくらかな 兵庫 庫増 尾真 棹

朝落花 兵庫 庫増 尾真 棹

うらくと上る朝日にはえなから散りゆく花のをしくもある哉 東京 藤崎 虎二

春月 東京 藤崎 虎二

淀川をつゝみのやなきめくめともまたかけ寒し春の夜の月 福岡 長主 禎子

福岡 福岡 長主 禎子

風なくて花ちる里のゆふそらにかすみてにほふ三日月のかけ 兵庫 庫小 島羊 古

兵庫 兵庫 庫小 島羊 古

花をみしひとはかへりて淀川のつゝみしつかに月そかすめる

こきくたる舟唄はかりきこえけり川面かすむ春の夜の月 岡山 梶村よし江

里川のやなきのいとにかしりけりおほろにかすむ春の夜の月 東京 齋田隆治

高殿のことのしらへそなつかしき櫻ちりくるおほろ月夜に 石川 森川敏子

さくらさく遠山もとはくれそめて花にかすめる朧夜のつき 茨城 堀川倉四郎

雨をよふかはつの聲に春のよの月もかさをはしなさしりけり 富山 沼田雪子

山のはに月はのほれり薄墨のはなの木蔭をまとにゑかきて 廣島 研野熊次郎

あらし山かすみなからに暮れそめて桂のさとに月そにほへる 兵庫 庫太田富子

春月入窓

奈 頁 片 山 や す 子

たかとの花見のうたけ賑ひて月もさしいるまとの内かな

春月朧

岡 山 室 多 美 子

ひはりなく聲またそらに残れとも月はおほろに匂ひそめたる

朧 月

三 重 荒 木 田 泰 圀

いくはくのあたひなるらむいりあひの花にほへる月の光は

愛 媛

佐 藤 久 子

我山のはなの雲間をもれいておほろに匂ふ春の夜のつき

早 春 月

宮 城 茂 木 安 勝

折々は雪けのくものかしり来てまたかけ寒しはるの夜の月

花 間 月

岡 山 大 塚 義 男

おほろ夜の月おもしろみかへるさも同しかけふむ花の下道

おほろ夜

山 口 吉 村 ま つ 子

たのみなき戀もするかな月かけも花もおほろに匂ふ春の夜

花曇

ふりもせすはれんともせす花をまつ空のならひのうす曇して
東京 松浦 英子

百濟野も春はゝるめくけしきなり野へも山へも花くもりして
朝 鮮 岡テ ッ 子

もゝとりも曉しらてねふるらむ花はしらめといまたこゑなし
春 曉 靜 岡 入 交 貞 子

霞たつ須磨のうら波あけそめて夢のことくに帆影ほのみゆ
鹿兒島 津留 武彦

花かけは白みそめたりあかつきの月をかすみのおくに残して
熊 本 出口 市藏

ほの／＼としらむにつれて春霞かすまぬやまもあらはれにけり
兵 庫 神村 照子

東山またゆめさめぬあかつきの花のおくよりひ／＼かねの音
神奈川 馬渡 増子

有明の月はかすみにかけきて花のみしろしあかつきの庭
青 森 松原 季男

横雲もはなにわかれやしむらん峰にたよふ春のあけほの
秋 田 下 遠 重 遠

沖遠く白帆かすみてよる波のいそに花ちる春のあけほの
東 京 國 枝 彦 子

朝きよめをへて木の芽をにる窓に梅のかをりてうくひすのなく
朝 鮮 岡野 覺太郎

つはくらめ古巢たつねてかへり來ぬ昔わする人もある世に
東 京 中 頭 晟 剛

春風になひく柳のかたいとにむつるゝ如くつはめとひかふ
同 祖父 江喜代二

よきはるを告くるか如く軒にきてなれ／＼しくも燕かたらふ
長 野 竹 澤 鷹 三郎

田上燕

兵庫松

三八

谷庄藏

あしゆるく春の山田をすく牛の背をすりこえて燕とひかふ

ひはり

東京古

田邦子

うきたてる人の心をみそらまでひきあけてなく朝ひはりかな

雲外雲雀

秋田高

根來助

雲居にて春の女神のうたふかと思ふは野へのひはりなりけり

歸雁

茨城富

永春吉

歸る雁いさ言問はんつれてこしはらからのみに變りなきやと

岡山周

藤政太

人ならはしはしとめん朧夜の花をみすてかへるかりかね

小鳥

東京石

原れい子

なきかはす小鳥のこゑも面白しつはき花咲く庭の垣根に

雉子

大阪堀

良子

なく雉子の聲あはれなり野焼してなひくけふりの未の廣野に

春鳥

長崎水野尾忠三郎

みるかきり白雲なしてさくはなのなかよりもる鶯の聲

夕雲雀

神奈川平

準彌

董つむ子らはかへりて夕霞たなひく小野にひはりなくなり

春日野遊

熊本本

田静子

駒ならぬおのか心もつなかれてすみれさく野にけふもくらしつ

兵庫墨

井兼也

春の野に遊ひ疲れてねむる子の手よりこぼるたにほの花

岩手天

童金市

繪日傘に春日をよきてこゝかして董さく野にあそぶ少女子

富山室

崎規子

永き日を遊ひつかれていこふ野の麥畑たかくゆふひはりなく

兵庫加

藤新吾

蝶おひて少女あそへり千代紙をちらしことき春のはな野に

春之部

三九

野遊ひにつかれはてけむ子らはみな董の床に伏して歌へり 大阪山住今子

野遊

埼玉桑田良隆

暮るゝ野に人聲すなり花かけをみすてかねしは我はかりかは

春野

秋田諸井正明

雲雀なきすみれ花さく野にくれは老の心もはるめきてけり

蝶

愛媛森

琴子

瓶にさす花のにほひやしたふらむ窓のうちまで蝶のいりくる

胡蝶

三重玉

崎光起

ひらくと胡蝶まふなり尾をはりて孔雀のたてる庭の花かけ

山形

大石幸七

董さく野路ゆく人の先になりあとになりつゝ胡蝶むつるゝ

窓蝶

同

古家才次郎

いつの間に蝶窓は口入りにけん小瓶にさしゝ花やしたへる

菜の花

静岡小薬勢伊子

小牛なく伏家の庭の春風にはらくとちるかきの菜の花

藤

愛知諸

角友平

神園につるの糸をうるをちか軒かくるゝはかり藤のはなさく

山梨

中村百太郎

やまかつか斧研く谷の川岸の巖にかゝりふちのはなさく

藤懸松

東京清水忠長

九重のかしこところの松か枝に御代なかくと藤のはなさく

熊本

本田静子

かけたかき松のくらゐもみゆるかなかゝれる藤に春をかさりて

巖上藤

静岡室

伏良泰

岩の上にはひまつはれる藤のはな白紫のみはえうつくし

つゝじ

京都井

關永成

もちひうる道の伏屋の軒ちかくつゝしさきたり岡こえのみち

垣山吹

山吹の花こそかきはつくりけれつゆもへたてぬ隣さかひに
新潟 荆木 かん子

山吹

谷川の水くむをとめ袖ふれてなかれにちらす山吹のはな
北海道 豊福 常三郎

清水ひくかけひにそひておりくれは谷の一つ家山吹のさく
山口 藤村 春香

ものたらぬ賤か伏屋の垣根にもあまりてさけるやまふきの花
兵庫 藤井 ちた子

水車ゆるくまはれる里川のかたきしにさくやまふきの花
静岡 是永 綿子

桃花
大阪 石井 秀子

ゆく汽車のしらせのひく踏切の小屋のめぐりにひ桃花さく
田家桃花
宮城 赤尾 保子

朝かすみたなひく里に牛なきて新わら垣根もゝのはなさく

桃

霞よりいてゝかすみにわけ入れは谷の一村桃のはなさく
福島 金澤 六郎

水邊桃

ひしろ帆の影もをりく見ゆるかなのもゝ花さく里の小川に
愛媛 岡田 賢次郎

庭桃

接木して三年かさねし我庭の桃にはしめて花さきにけり
鹿児島 四本 道邦

牡丹

春にあまる花の色香を廿日草なつにもわけてさくそうれしき
三重 松島 叶

水仙

はやさきの梅にならひて霜かれの庭に匂へり水仙のはな
佐賀 小鳥井 喜尾子

春山

アルプスとよはるゝ山も春のきてみねにふもとに霞たなひく
長野 佐々木 一衛

岩つゝしたにまゝにささみちて春美しき伊賀のやまこえ
三重 成田 三郎

山遊

石川藤本純吉

四四

小車をふもとにすてゝ老か身も山みちのほる花さかりかな

春日永

北海道 森見作

鍬すてゝ煙草くゆらす田人みゆ春の日なかに倦みはてつらん

汐干狩

兵庫 高木光枝子

うるはしき貝も拾へりわたのはら潮の干潟に遠くあそひて

春の歌

石川池田美枝子

しゝみ賣るをみなのこゑもうち霞みわか門すきて春の町ゆく

春田

愛知 角田ともゑ子

うちかへす土もにほへる小山田にたにしを拾ふ子らの聲する

貧家春

東京 中山榮太郎

草茸の軒もかくれて桃さくら花に富みたるひなのあはらや

養蠶

鳥取 安江嘉千雄

朝けすら箸とるひまのなかりけりまふしにうつす蠶拾ひに

春釣

長野 田中文太郎

昨日今日釣する人もみえそめぬ山吹にほふ谷のなかれに

山村春

神奈川 石井豊永

さくら花うゑつけられて十年へし里の一村世に知られけり

春山家

岡山 小野光子

世の外とちもひいりにし山の庵もはなさくはるは心うかれつ

春の水

東京 清水川石五郎

都人きかぬうくひす見ぬかすみ占めて楽しむ山家うれしも

春山枯木

同 西山むら子

春風に水のこゝろもぬるむらん小川のなかれかきろひのたつ

田家春

千葉 一宮櫻村

はなやかに春をはよそふ山の端にかるゝ老松あはれなるかな

里の子のたにしをひろふ垣内田の水ぬるむまで春風のよく

神奈川 清水圓次郎

和風報春

静岡

永田惣太郎

春橋

東京

押田よの子

春湖

同

春永達子

春堤

福岡

三輪則一

春道

宮城

菅野圓藏

同

同

多田捨巳

春松

千葉

高石精一

草も木もはなさきほこる春の日をふるさまなる庭の老松

かすみよりいて霞にいろ道末をうつむる花のしらくも

はたか木のなかにまじりて萬作のはなさきにほふ春の山道

人柱うつめきつきし川つみはるかせふきてすみれ花さく

かけうつすふしの姿はまた白し蘆のみつうみ水はぬるめと

酒ひさくかりやかれり花見人しけくゆきかふあら川のはし

あいつからはるの心になりけりすその里の風のとかにて

春舟

兵庫

田村てう子

のとかなりかすみ流るゝ木曾川をのほりゆくふね下りくる舟

山形

伊藤忠夫

春浪

岩手

狩野鷹山

花とちり玉とくたけていそさきの岩ほにほふ春の荒波

春海

長崎

阿比留信子

ゆめのこと鳥はうかへりあかつきの風もねむれるはるの海原

新潟

齋藤賢作

春家

山形

鈴木木義之

雪かこひとりて明くなりけり春あつる出羽の里わも

砂

盛岡

飯田實哉子

潮干狩あそひつかれて歸る子のひたひにのこる海の白砂

春之部

春光

兵庫 長谷川 翠生

きのふまで雪に埋れし露の芽にはるの光のみえそめにけり

春水到

山口 大田 清子

さくら鯛むれて波間にをとるみゆ水のなかにも春やたつらん

春夢

兵庫 有永 常子

うつゝ世に亡き友までも加はりて花見る春の夢路たのしも

春未央

熊本 本隆 知

なかはたに咲かぬを見れば春の日も櫻もいまた奥はありけり

春

廣島 小田 勝次

心地よき春はきにけり行くところ柳はけふり風はぬるみて

霞浦春望

茨城 横須賀 倉太郎

ふし筑波なみにうつりて見ゆるかな霞たなひくうらの朝なき

春車

福岡 小柳 榮太郎

あやしつゝうはか押しゆく車には翫具にそへて花ものせたり

春眠

京都 中村 藤風

よむ書はいつか枕となりけりあまりのときき春の日なかに

春装

東京 渡部 節子

とりくにはやりの衣よそほひしをとめ美しはるの都は

春景雜見

岐阜 坂倉 仁五郎

水ぬるむ小田の田螺を拾ふみゆほうかむりする里の少女子

春日凱旋兵を迎へて

群馬 萩原 和一郎

凱旋にときめくもある春の日の花とちりにし人あはれなり

山家春

愛知 三井 惟雄

山ふかき谷間のいほも花さけは都にまさるなかめなりけり

山家晩春

青森 宇野 要七

花ちれはうかれ心の人たえてはるしつかなるやまかけの庵

春を惜しむ

石川 渡邊 初雄子

風にちる花ひとひらも惜しきかなくれんとすらむ春の夕は

春 畑

氣味わるくはたしになりて春まきの畠たかやすたをやめも見ゆ

東京 安原 たか子

種とるとのこし、大根はなさきぬ春雨けふる背戸の山畑

山口 未田 三枝

草いちこなへをうつしぬ梅そのゝかたへ一坪はたにひらきて

群馬 伏島 たき子

天地にみちたる春ののとけさをかすむ夕のいろにみるかな

京都 山岡 喜美子

うちわたす野邊の雪間のところ／＼青みそめたり春の若草

長崎 森 下 初音

朝かすみなひく都の軒つゝき春のいたらぬ門なかりけり

毎家有春 京都 竹内 宣義

岡こえの里のなか道こゝかしかけるひもえてひもゝ花さく

行路春 東京 小堀 清子

暮 春

木のもとにこほれつくして藪椿はなも残らす春くれんとす

同 入山 れき子

孫つれて花の名所めぐりけり七日あまりの旅をかさねて

茨城 永長 福美

長閑なるこゝろの駒にまかせつゝ花見かてらの旅そたのしき

佐賀 稲葉 誠月

やはらけき春の風にもたへやらてうなたれかちに海棠のさく

福岡 岡澤 麟太郎

やまもとの里の燈火みえそめつ花の木かけはまたくれねとも

新潟 鴻江 部貞子

春風に水もぬるみて五十鈴川さよきなかれにかきろひのたつ

三重 増田 もとへ

狩人に狩りのこされしあし鴨のうれしなきする春の雨かな

春之部 東京 大町 五城

夏之部

藻刈舟

東京千

葉胤明

花さかん草もあらんを藻刈舟へたてなくこそかりつくしけれ

曉蓮

同鳥

野幸次

もや深き青田のをちにほのみえてあけかた清き花はちすかな

竹間夏月

同武島

又次郎

涼しさをいとみかきつゆむすふ竹の葉こしにさしいつる月

夏窓

同遠山

英一

をすこしに帆影もみえて沖つ風いりくる窓は涼しかりけり

水聲遠

同金子

元臣

熊笹の風にまきるゝ水の音きゝさためんと瀧みちにたつ

夏井

同加藤

義清

あつゝよりあふるゝ水を窓にみるいは羨し夏のこのころ

夏月

同外山

且正

みつらみの岸のあけはに更けてなほ人こゑすなり夏の夜の月

首夏風

福岡山

川敬行

若葉ふく風こゝちよし昨日まで花ををしみし木かけなれとも

山風涼

奈良南

園真誠

春日山みつえさしたるおほすきの下道かよふ風のすゝしさ

曉風

兵庫草

野藤次

つゆしけき稲葉わたりてふく風にあかつきすゝし小山田の庵

涼風

愛媛前

谷初子

ふく風をこゝにあつめし心地してゆふへ涼しき磯のたかとの

松風涼

栃木濱

中章七郎

尺八の遠音さそひて我せとのあを田をわたる風そすゝしさ

よもすから軒の松風かよひきて書みる窓はすゝしかりけり

夏之部

曉風涼

兵庫 増

尾真 棹

ひた走る汽車の窓口かせすし興津あたりのあかつきのころ

夏風

山口 三

谷玄 珠

海こしに遠きつくしのやま見えてこゝろ涼しきせとの夕風

岡山 周

藤政 太

里人もひるのあつさを忘るらむ夕風わたる青田めぐりて

兵庫 川

越陸 子

あけはなつ窓にふき入るなまぬるき風すら嬉し夏の日さかり

山口 紀

藤まき 子

心こめしもてなしよりも夏の日窓に涼しき風そうれしき

東京 秋

元良 子

ひとしきりなきたつ蟬の聲やみて木立を渡る風のすししさ

静岡 是

永錦 子

潮あむる子らを待ちつゝ掛茶屋にくつろき居れば風の涼しも

和歌山 江尻 一枝子

肌さはり涼しき風のあちはひはなつの夕のはしむにそしる

石川 近

江政 子

かしかなく青葉のかけの川風は夏を吹き消す涼しさにして

群馬 未

至磨 大洲

竹のかけ障子にうごく夏の夜のかせは水よりすしかりけり

東京 池

田孝 治

さら／＼と呉竹をふく音のして軒端にうつる夜風すししも

大分 龜

井増 治

おもしろきふしはなけれとくれ竹のよこと涼しき風の音かな

京都 竹

村仲 城

かつ／＼も巻葉をときて若竹の夜かせにゆらく姿すししも

秋田 高

根來 助

ふしの雪葉こしにみゆる松かけは夏の日中もかせそすしき

松下風

そよ／＼と夏のめくみを吹きおろすこかけすしき松風の音 愛知 渡邊勘一郎

松下待風

松かねにこしうちかけて蟲賣かたはこくゆらし夕かせそまつ 東京 小澤玉子

夏夜待風

青すたれ半をまきて夕月のすしきかけにかせをまつかな 愛媛 佐藤義道

水風涼

波はみな月のひかりになりゆきて夕風すしきしのたかとの 新潟 江部大作

竹林風

夕立のあめふることき音たてすしかせそよ／＼裏の竹村 東京 清水川石五郎

梅雨

たゝわひし昨日も今日もふりつくこの梅雨にこゝろくさりて 同 濱村梅子

五月雨に里川つゝみ水こえてみちに鱒ふる鮒をみるかな

五月雨に里川つゝみ水こえてみちに鱒ふる鮒をみるかな 佐賀 於保謙孜

静岡 小林信一

早苗とる里の少女のぬれきぬをほす日もあらぬ五月雨の空 富山 長原茂次郎

けふいくか降る五月雨にうゑをへし早苗田こして水のおふるゝ 東京 新井徳之助

五月雨は日毎つゝきて日かせきのよほろの口はかわきこそすれ 群馬 木暮好文

赤城山ひねもす雲におほはれて心もくもるさみたれの空 福島 安藤孝寛

庭梅雨

みつえさす櫻の若葉かけくらくふりこそつゝけ庭のさみたれ 大阪 堀良子

梅雨の日をふるまゝに朽ちにけん庭のしをり戸きのこ生ひたり 神奈川 佐藤貞雄

池梅雨

さみたれに池の水かさささりけり蒲の穂先もちひたるまで 神奈川 佐藤貞雄

水の上にはうきもしけりて池にすむろくつをとる梅雨のころ
宮城 鈴木三郎

きのふけふさみたれ降りて大池の堤あやふし水のまさりて
岩手 後藤かつ子

旅梅雨

くに／＼の話あつめて湯の宿にさく梅雨もたぬしかりけり
佐賀 野崎 斧雄

梅雨久

木小屋なる柴はしめりてあさけたく煙もほそき梅雨のころ
茨城 富永 春吉

秋田 諸

抜捨てし草もいつしか根つきけり思へはひさしさみたれの雨
秋田 諸井 正明

鹿児島 牧

學舎に通ふ小供かさす傘のくちても晴れぬさみたれのあめ
鹿児島 牧元 竹次

谷梅雨

五月雨にふりとさゝれて谷の戸をけふは雲さへいてんともせず
愛知 村瀬 市次郎

夕梅雨

奈良 吉村 源甫

雲間より夕日のさして東山虹うるはしくはるゝさみたれ

市梅雨

栃木 奥田 正直

梅雨のふるき市路は人たえてなにとはなしに淋しかりけり

梅雨不降

兵庫 高橋 光枝

なか／＼に水あらそひの種まきて降らむともせぬ梅雨のあめ

六月の田圃

東京 板倉 綾羽

早苗田のつく堀切繪日かさの少女そありく花苧蒲みて

福岡 浅

福岡 浅村 信作

麥の穂も黄色に色つきてなはしろの早苗めをはる企救の千町田

満洲 米

満洲 米山 元

カヲリヤンは目路の果までつらなりて村里近く豚のなくなり

富山 荒

富山 荒木 諒雄

伏庵にかはつき／＼ねふりけり田植もをへて雨のひと日を

新竹露

三 重 山

川 薫 三

旅路よりかへれば庭の竹の子はつゆをやとして巻葉ときたる

新竹露になひく

山 口 紀

藤 織 文

あつまやに通ふ苔路をさへきりぬ庭の若竹露になひきて

朝風に竹のまきはのなひき合ひてふみよむ窓に露のこぼるゝ

岡 山 小

寺 静 枝

さしくたすを舟の灯かけほの見えて入江すゝしく月を流るゝ

夏夜舟

東 京 中

山 榮 太 郎

はすの葉におく白露をまろはしてゆく朝風の心地よきかな

風前荷露

長 野 白

田 次 尾

海山に暑さをさけむ身ならねはあふきそ夏のいのちなりける

扇

宮 城 菅

野 圓 藏

風おこすうつはもあれと便りよく涼しきものは扇なりけり

群 馬 萩 原 和 一 郎

群 馬 萩 原 和 一 郎

萩 原 和 一 郎

團 扇

奈 良 片 山 や す 子

奈 良 片 山 や す 子

さを鹿のかたちすかしゝならうちはならせは秋の風かようふなり

水 草

三 重 伊 藤 み の 子

三 重 伊 藤 み の 子

池水も湯となる夏の日さかりに涼しくさける睡蓮のはな

夏草庵

東 京 渡 邊 幸 子

東 京 渡 邊 幸 子

苔のむす庭にかけひの水引きてまとなつなき草の庵かな

夏富士

旅 順 今 村 龍 城

旅 順 今 村 龍 城

たちさわく夕立くものたえまよりゆきも見えけりふしの神山

登 山

千 葉 長 岡 熊 雄

千 葉 長 岡 熊 雄

山中に眞柴刈りしきかりねしてあすはきはめむ雪の谷間を

夏 瀧

鹿 兒 島 菊 地 經 文

鹿 兒 島 菊 地 經 文

たとりゆく夏の山路にしふきして涼しくかゝるたまたれの瀧

涼しさにすゝしさそへて谷かけの青葉の奥に瀧の音する 愛知 石黒みづ子

山中開瀧

瀧津瀬の近くなるらし若葉山すゝしき音のきこえきにけり 東京 熊井理總

夏海

夏しらぬちきのしほ風すゝしくて家路わするゝ磯の松原 三重 藤森良寛

三重

あらかねのつちもさくへき夏の日は波の音さへ涼しともなし 静岡 岡入交貞子

三重

しほかせに袂ふかせていそさきに魚釣りすれば夏としもなし 伊東 祐誠

夏山

麓よりしけれひはら庭にしてなつはすみよき山蔭の庵 長崎 阿比留信子

宮城

海もあれとことしの夏は箱根山なゝゆめくりてやまひ忘れん 山田 さと子

夏河

雪よりも白き麻地のゆかたきてみつの月みる大川のさし 石川 渡邊とよ子

夏川に遊ひて

針先も見ゆるはかりの矢嶋川さゝれを縫ひて小鮎さはしる 秋田 油川紫石

夏人事

笠の緒を汗にぬらして日さかりにたくさとなるなり里の少女子 福島 秋月まし子

東京

ゆかたきてラデオさゝつゝ子守する夏の夕のくらしよきかな 石川 宇兵衛

夏の村人

とれとく草生ひしける田に畑に出てゝいそしむ夏の村人 三重 正八

山家夏

麥つきの日和となりて山里の庭せまきまでほしひろけたる 熊本 本田行藏

夏田家

里人か田草とるまをあせみちの日よけの蔭にねふる幼児 群馬 馬屋野竹男

夏水樓

宮城三

上喜藏

あけはなつ窓に川風ふきいりてはしのたもとのかよとに夏なし

水郷夏

三重伴

こと子

うはらさき夜はほたるのかけ見えて夏は涼しき川そひの宿

ほたるえひ光る入江をめぐらしみ涼みかてらの舟を賑ふ

千葉一

宮櫻村

夕顔

三重鬼

島貞吉

ひくらしのなきやむ庭の竹垣にさきいてにけりゆうかほの花

山口藤

村春香

潮明り残るいそへの海人か家のかきねなつかし夕顔のはな

和歌山赤

松豊治

さしのほる月の光もいろはえて涼しくみする夕顔のはな

山形大

石幸七

水車しつかにめくるわらこやののきは涼しきゆうかほのはな

垣薔薇

京都都築平次郎

庭の面に蜂をやしなふ函みえてまかきのうはら風にかをれり

うばら

東京丸尾初子

夏草のしけみのなかなつかしくうはらの花の咲きて匂へり

百合花

岡山浅羽春之

夏やせの妹をしとへは枕邊にふしめかちにも匂ふ白百合

野百合

鹿児島伊集院省三

姫百合の花つゝましく匂ふかないはら時めくなつの野中に

ひるがほ

東京土肥孝子

山里のとなり境のしはかきにはひまつはりてひるかほのさく

夏花

三重重堤元道

蟬しくれきゝて涼しきもりかけの庵のかきねに雪の下さく

岡山小

野光子

日まはりのすゝしく匂ふ庭の面になつしらさくの花もさきたり

杜 若

靜岡 梶

六六 熨斗三郎

苔むせる石のそり橋中にして池もせにさくかきつはたかな

花ちりてさひしくなりし藤棚のうつる汀にかきつはたさく

旅人の白き菅笠日にてりてわかはこの並木かせかをるなり

うすくこく柳の若葉しけりあひてみとり涼しき川そひのみち

湊川神のみ庭のおくふかくすの若葉のかをりなつかし

いなり山ならふ鳥居もかくれけりいかきの木々の若葉茂りて

をしけれと富士みる方はすかしけり我窓おほふさりの若葉を

同 押田よの子
 兵 庫 堀 場 鍊 吉
 村雨のはれし若葉に朝日子の影すか／＼し庭のうゑこみ
 新 緑 福 島 鈴 木 重 義
 神垣の松のときはのわかぬまで梅も櫻もみとりさしたる
 山 本 修
 ことしまたみつえ茂りて常磐木も色あたらしくさす若葉かな
 埼 玉 星 野 安
 富士のねの雪にはえけり足柄も箱根もなへて若葉しけりて
 東 京 齋 藤 房 次 郎
 若みとりいろのゆかりもいつしかと青葉になれる夏木立かな
 北 海 道 井 上 近 藏
 つき山のともし火青くみゆるまで庭の熊樗若葉さしたり

みつ枝さす稻荷の杜のみたらしにうつる緑の深くもあるかな 岡山 内田久太郎

南うけし窓もをくらくなりにけり軒の青桐わかはしけりて 山口 齋藤鶴平

あたらしき山となりなき松柏古木若木はみなみとりして 朝鮮 岡壽作

みつえさす若葉のかをる並木みちさとひらきして新嫁のゆく 神奈川 中村榮之助

みつ枝さす木々の若葉の浅緑あさのねさめのなつかしきかな 岩手 後藤かつ子

鶯はかへる古巢にまよふらむ谷はわかはの茂りあひたる 東京 永井高子

うなゐらは若葉の杜にうちつとひもの學ひせり夏の日さかり 兵庫 土居英成

千葉 長島くに子

若葉かけうつろふ色の涼しさに池のみきは、さうりうかりけり 石川 山本嫩子

風わたる五月の庭のはりものも青くみえけり若葉うつりて 千葉 石井義三郎

ひらさめにぬれし榎の若みとりそめたるよりも美しきかな 布哇 吉澄保

七月の空にしをる、くまかしの青葉の雨の音そす、しき 兵庫 長谷川翠生

植込の楓のみつ枝ひろこりて庭のともし火みえすなりぬる 同 永井次子

しけりあふ庭のかへての若緑あめにうつくしはれてうつくし 岡山 山本夢想

梢みな青葉になりて目になれし山あたらしく見ゆる頃かな 青葉

早苗

東京 鱗

七〇

五月雨のふる日よらぬ日ありたちて早苗とるなり里の少女は

道のへの苗代くみも色つきてとるへくなりぬ小田のわか苗

愛知 諸

角友平

少女らか唄ひはやして植ゑわたす小田の早苗のうるはしきかな

兵庫 若井

きみ子

夕月のかけさしうつる小山田にまた早苗とる人の影みゆ

同 渡邊

千榮

なはしろに老も若きも下りたちて早苗とるなり朝またきより

宮城 内馬場

文彌

遠近の山田ひねもすにきはへり早苗とりく唄ふ聲して

宮崎 山内

泰三

うゑつけの人手たらさる里ならん早苗ははやもふしたちにけり

里早苗

福井 藤井

敬貞

夏田

群馬 馬

小保方 榮治郎

ほにいてん秋のみりを楽しみ田草とるなり夏の日さかり

青田

兵庫 山本

小四郎

さすかにも瑞穂のくにの夏なれや里より里に青田つらなる

竹ノ子

福岡 園山

尊篤

うつくしき皮の衣をぬきすて一ふしみゆる庭の竹の子

若竹

宮城 館内

孝十郎

あきわたすよことの露をちからにて伸ひまさりゆく庭の若竹

新竹

同 富士原

二郎

はきとるあした涼しきわか庭に風のゆくへを見する若竹

鹿兒島 早田

恕平

巻葉とく庭の若竹あさかせに露をちらすも涼しかりけり

東京 植栗

照彦

皮衣みなぬきすて竹の子のつゆになひける姿すししも

朝新竹

兵庫高

七二 橋光枝

隣より垣根くさりて今朝もまたひととそはる庭のたけの子

蚊遣

宮崎竹

井一郎

いねし子に蚊をさしせしと母親か心つくしのかやりたくなり

高知長

尾良博

たきすてしかやりの煙あかつきの雲になりゆく山のひとつ家

熊本出

口市藏

軒つたひなひく杉葉の蚊遣火に竹のあみ戸もふしよかりけり

雨後蚊遣

茨城内

田熊藏

夕立にぬれし杉葉をそのまゝにいふすかやりの煙したはふ

遠村蚊遣

東京木

村牧

遠方の山根になひく蚊やり火に賤か伏屋の敷もしらるゝ

夏月

山形白

崎良彌

神垣の青葉すゝしき月かけは都のそらのものとしもなし

奈良石橋亦夫

手にむすぶ水の中にもかけさしてさやかにうつる夏の夜の月

京都神服木之助

しけりあふ庭の青葉のひまもりて涼しくにほふ夕月のかけ

埼玉中村近藏

水車かと田にかけてあかつきの月くみいるゝ里の小田もり

兵庫小野蓮子

築山のたきの涼しさ目にみせて松の木に月はのほりぬ

同高木光江

夕立の雨雲はれて山のはにすゝしくのほるみしか夜の月

奈良真梅本藤助

夏の日のくるゝを松のこすゑよりさし出る月のかけの涼しさ

福岡出光松壽

藤椅子を庭にうつして若竹の葉風すゝしき月をみるかな

夕立のなこりの露にやとかりて風にこぼるゝ夏の夜の月 千葉 星越 猪之助

吾妹子か西瓜ひたせるいさらゐにうつりて涼し夕月のかけ 京都 竹内 幾子

短夜は早やあけはて、山の端に入りおくれたる月そさまよふ 東京 大浪 安民

山松の梢はなれてさす月をねなからかやのうちに見るかな 長崎 森下 初音

涼み舟かせにまかせて島山の松にか、れる月をみるかな 長崎 阿比留 敬助

くたけちる波のしふきに磯さきの月の光もぬれてす、しき 山口 大田 清子

あま人はしほたれ衣ぬきかへてよるはす、しき月やみるらむ 三重 重荒 木田 泰園

水上夏月 島根 三原 泰吉

水郷夏月 東京 入山 れき子

風かよふ洲崎の蘆になみかけて夕潮みてり月もうかへり 静岡 岡 佐野 みつ子

立ちよれば吹く風涼し夏の夜の月影よする池のさゝなみ 茨城 高木 吉太郎

河鹿なくこゑも流れて奥久慈の瀬々にくたくる月のす、しさ 熊本 武藤 かさひ

すむ月に夜釣りする人みゆるかな涼みかてらの川の中洲に 兵庫 庫内 藤 榮 昭

吹く風にはちすの露のこほれきてわをかく池の月のす、しさ 福岡 大塚 速水

堪へかたき夏の暑さを池水にあらひてうつる月のかけかな

夏夕月

大阪三

七六

宅淑惠

さをとめかまた植ふはてぬ小山田のみつに影さす夕月夜かな

夕夏月

同

田口このゑ

いよすたれ動かす風に涼しさをそへてほのめく夕月のかけ

深夜夏月

山口

高崎きわ子

なつ萩の葉末につゆのきらめきてふけゆくよはの月の涼しさ

月を踏む

北海道

山下みすゑ

湯浴みして里川堤よかせおふたもと涼しき月のかけかな

竹間夏月

長野

飯沼準一郎

風そよく竹の葉かくれ見えかくれすしさをそふる夏の夜の月

樹間夏月

岐阜

坂倉仁五郎

うち水のかわかぬ上に涼しくも木の間もれきて月の影さす

月明涼

朝鮮

岡宇輔

すみわたるみ空の月をみる窓は風なき夜もあつさ忘るゝ

月下涼

山口國

廣八

助

はしひして月の光に涼みつゝうた思ひをれば夏としもなし

月涼

廣島

牧本了之介

業をへし今日のおつさも忘れつゝ波にくたくる月をみるかな

蓮上月

栃木

田村家壽子

夕立ははやふりすきて蓮の葉のつゆにきらめく月のすししさ

對泉待月

神奈川

日高數子

汲みほしゝ山の清水も夏の夜の月まつほとにわきかへりつゝ

涼月

大分

大島重雄

川風に暑さわするゝゆうまくれ月もすゝみて水にうつろふ

雨後夏月

佐賀

小島井喜尾子

夕立のなこりの露に風たちて月のかけちる庭のくさはら

夕立後の月

岩手

宮澤善治

夕立はほとなくはれて山の端に涼しくかゝる夏の夜の月

月前蚊遣

たきさして人は涼みにいてつらん月にうすらくをちの蚊遣火

夏雲

さるなめり花ちる庭の夕風に雲もすしくうこきそめけり

山の端にかゝると見てし黒雲のくつれて里に雨をふらしぬ

そひえたつ雪の白嶺のみるかうちになたれくつる、夏の夕雲

赤城山かゝりし雲の切れめより折々もる、いなひかりかな

なるかみをのする雨雲すきゆきて夕日かゝやくなつの青空

いかつちの音ともなひて黒雲は秩父の山をくつれいてけり

神奈川 西

岩手 天

岐阜 早濑

福岡 長

群馬 石

富山 關

東京 藁

久子

童金市

谷玉惠

主禎子

原春吉

清次郎

科松伯

夏夕雲

照りつ、く夏の日さしに夕焼のそらさへもえて雲をこかせる

晩夏雲

峰なし、雲のかけきえて大空ははやも秋めくきのふけふかな

夕雲

ひわれたにひと雨ほしと田人らかあふく夕空くもの亂る、

夏草

貸し家の札をはりたる門口のかよひちもなくしける夏草

朝露を吹きこぼしつゝなつくさのみとり波たつ風のすゝしさ

夏草のはひこるみても世の人のあれゆくこゝろ思ひこそやれ

たきしふき風に流れて夏なからあつさを知らぬたにの道芝

長野 北原 順一

山形 菊地 秀言

千葉 西周 政次郎

愛知 石原 榮子

千葉 本城 巳之助

神奈川 井上 金治郎

京都 市田 富藏

閑庭夏草

夏草のしけみの中にやり水の音もすゝしきかくれ家の庭

浦夏草

海人が投網つくろふすな山の松の根しめてひるかほのさく

夏草露

なつくさの朝露ふむも心地よしまた日のさゝぬ庭におりたち

夏草滋

小田にひく細きなかれの見えぬまで茂りあひにけり野邊の夏草

若草

あけはなつ離座敷の床の間にいけて涼しき瓶のわかあし

夏草花

水蓮のはなにましりて鬼ひしの白きも匂ふ池のおもかな

夏日暮

かはほりに追ひくつされぬ夕暮の軒端いふせくたてる蚊はしら

群馬 須藤 注連 吉

富山 室崎 規子

新潟 和田 茂幹

岡山 野尚 明

奈良 久保 良祐

東京 西山 むら子

朝鮮 野村 安昭

夏夕暮

田草とりすまして歸る夕まくれ子らの土産にとるほたるかな

夏夕日

夕立のはれたるあとの涼しさをまたおひやかす夕日かけかな

夏夕

若葉さす八ツ手のかけに燈籠のあかり涼しきはつなつの宵

夕暮をまらしかひなく風たえて窓にいふせくやふ蚊むれくる

水あみし見等はかへりて里川に月かけ浮ふ夏のゆふくれ

かしかなく谷の流をしたにみてゆふへすゝしき山の湯の宿

三日月も少女さひして涼しげにほそ眉つくる夏のゆふくれ

岡山 四十塚 圓十郎

河田 楓 舟

群馬 村田 宗永

佐賀 出雲 侃

京都 大山 春見

愛媛 前谷 初子

熊本 坂本 隆知

夏夜

見はるかす青田をてらす月影のさし入るふせや風そすしき
岡山秋山舜造

門すゝみ語りふかし夏夜の空をなゝめに星の流るゝ
山梨中村百太郎

洗ひ髪かせにふかせておはしまの月にかわすゆふへ涼しも
兵庫竹本をつた

湯あみして川邊にたては清々し水の上より風のふきして
同大西たつ子

心すらすしかりけり夕風に湯浴みあかりの肌吹かせて
大分塚田武徳

橋の上に螢追ふ子のこゑもしてふく風すしし川面の宿
佐賀坂元柳子

ゆあみして門にいつれは夕暮のふく風すしし稻田わたりて
千葉北田甚之助

長崎横尾英延

湯上りの浴衣のまゝにくつろきておちたきつみる庭そ涼しき
福岡中牟田華仙

隣とちあくらならへて暑しといひあつしといひて涼む宵かな
東京佐藤林次

松下涼

まさかりの夏の暑さをよけにけり庭の笠松かけひろくして
愛知森川だい子

夕涼み

築山にまさ水なしてあけはなつ窓によりそふゆうへ涼しも
福岡内山小源次

川納涼

橋の上に人そつとへる川風にふきよせられて涼みすらしも
富山二宮正義

船納涼

さしくたすうさかの川の涼み船月のかけをものせてけるかな
長野河野金四郎

樹蔭納涼

風かよふ老木の松の下かけにときを忘れて涼みつるかな

笠ぬきてしはしすまむ岩つたふ清水さやく松のしたかけ 千葉 岩 岡 清 平

浦納涼 福島 萩 野 常 子

沖とほく白帆になつのはおちてあつさを洗ふ浦の夕波 山 梨 小 笠 原 淺 次 郎

納涼訪友 東 京 古 田 邦 子

ひさにあはぬ友とひなから月の夜に木かくれ道をゆくも涼しき 滋 賀 津 田 靜 江

夏夜涼 兵 庫 加 藤 新 吾

夕月のなかるゝかけのすゝしさを岸にふきくるよとの川かせ 茨 城 宮 本 松 之 助

蟬 滋 賀 津 田 靜 江

もち竿をもちてねらへる幼子のありとも知らず蟬はなくらむ 兵 庫 加 藤 新 吾

嬰兒のつり床かくるねむの木にねむりさそひて蟬そなくなる 茨 城 宮 本 松 之 助

なく蟬の聲さへすゝし水無月の照る日さへさる杉の下道 茨 城 宮 本 松 之 助

朝 蟬 三 重 岸 田 治 雄

晝の間はかしましけれと蟬のねも朝にきけは涼しかりけり 福 岡 塚 原 た よ 子

杜 蟬 群 馬 富 岡 糸 子

車引く馬をつなきて里人かすゝむもりかけせみのなくなり 福 島 五 ノ 井 珍 雄

もりの蟬とまる大木のそれよりもなく聲たかく聞えつるかな 福 岡 小 柳 榮 太 郎

風いれていこひし杜の梢よりおちくるの聲のすゝしさ 佐 賀 牛 島 秀 實

行路蟬 福 岡 小 柳 榮 太 郎

砂けむりたてゝ自動車はしりゆくみちの木蔭に蟬そなくなる 佐 賀 牛 島 秀 實

雨中蟬 三 重 三 浦 つ る 子

ふりそゝく雨のなかにもかしましく暑さをさけふ蟬の聲々 三 重 三 浦 つ る 子

雨後蟬 三 重 三 浦 つ る 子

雨はれて夕月かゝる庭松にまたひくらしの聲のきこゆる 三 重 三 浦 つ る 子

夕立のふりなかしたる暑さをはまたむしかへす蟬しくれかな 宮城一 迫健治

木蔭聞蟬

風まちてしはしやすらふ木の蔭になきたつ蟬の聲ぞ涼しき 長野竹澤 鷹三郎

樹蔭蟬

しはしとて木蔭にいこふかひもなく暑さをそふる蟬のもろ聲 群馬馬森 山英子

蟬聲滋

若葉かけ梢にしけくなくせみの聲あつからぬ小初瀬の山 東京小田 毎子

夕立雲

ふらてゆく夕立雲をうらみけり田子はひわるし青田なかめて 朝鮮岡 テウ子

峰とたち谷とくつれて夕立の雲は里わにはやせまりきぬ 北海道栗 賀祐之

里夕立

うなる子のなく聲やみてなる神のとろきの里に夕立そふる 青森松 木勘吉

山夕立

長野 池上久太郎

雨後涼

東京 國枝彦子

富士のねの雨雲はれて裾野よりふく風すし青田かをりて

夕立晴

大分 百留宅子

夕立はあとなく晴れてこすゑよりちる露すし松の下庵

市夕立

兵庫 藤井ちた子

ともし火のあかるき市のほし店をやみにかへして夕立のふる

馬上夕立

東京 千早正善

濡れしとて駒に鞭うち急くなりふる夕立にあと追はれつし

夕立

北海道 森見作

桐の葉もしをるし晝の暑さを洗ひてすし夕立のあめ

富士のねにかゝりし雲のくつれきて夕立すなり三保の松原

同 關源右衛門

鳴神のおとをのこして夕立の雨は晴れたりあつさ洗ひて
宮城 澁谷 鐘次郎

田人らかいのる心やかよひけむ夕立雲のそらにたよふ
三重 石野 たつ子

まちまちし里をはよけていたつらに海にそれゆく夕立のあめ
福岡 古川 松太郎

稲妻のひかりもあへすなる神のおととろきて夕立のふる
宮城 加藤 東助

晝の間はものにまされて聞えねとふけて涼しきましますの音
東京 祖父江 喜代二

眞玉なす月もくたけて涼しきはわきて流るゝ谷のましみつ
同 清水 繁子

風よりも涼しかりけり照る月の影もあふるゝはしりゐの水
鹿児島 宇都 宗一

松下泉

岡山 中山 寛

たちよりてしはしいこはむ風きよくしみつ流るゝ松の下かけ
山口 木部 連

松かけのしみつむすひて肌ふけは汗も忽ちかわきつるかな
神奈川 浅井 はな子

かしかなく聲の涼しく流れゆく岩間の清水みるもうつくし
布哇 三池 平三

なつ毎にむすひなれたる山川の月のかけくむゆふへ涼しも
群馬 馬井 上重徳

都人あつさをさくる山の湯は夏にもとほきところなりけり
福井 眞田 一夫

暑しとて住まは住まるゝ我宿を海に山にと何もとむらん
山避暑 長崎 水野 尾忠三郎

高樓避暑

松のあらし瀧のしよきを庭にして夏を見おろす山のたかとの

神奈川 大口 善音

海水浴

七福の神ならぬ人もつとふらし辨天島のなつのしほあみ

埼玉 中村 近藏

磯濱の海士の目をひく景色なり水着のまゝのみやこ少女子

茨城 飯田 信

しまくにの男女はおのかし、海原およくわさおほえてむ

兵庫 松本 阿喜子

螢

少女子かまねく扇の風にそれてふたゝひたかくとふ螢かな

東京 石原 れい子

やみ夜にもひかるとみえし白露は草にすかれる螢なりけり

大阪 中濱 富三郎

うなる兒の團扇の風におとろきて草葉の螢とひたちてゆく

長野 山岸 庄三郎

埼玉 石川 なみ子

涼風にゆらく軒端のしのふよりこほるゝ露はほたるなりけり

長崎 鴨川 祥司

河鹿なく聲のきこゆる山川の早瀬をみせてとふほたるかな

福島 邊見 綾雄

小女子の田植をへて足洗ふ堀の草よりたつほたるかな

福井 三野 文子

うなるこは涙くましきわけありて夜こと螢を狩りてうりゆく

岩手 遠藤 精晃

江 螢

くれ渡る千賀の入江の浪かしら照らす火かけは螢なりけり

福岡 永田 政吉

田家螢

水ひきてうゑわたしたるかきつ田を夜は螢にまかせてそ見る

長野 西野 入久子

簾外螢

まさき水に涼しさかよふまる窓の簾かすめてほたるとひゆく

うなわらのこよくとよふ聲さけて小簾のと近く螢とふなり 愛知 安井 信次

螢入簾

川風のすすきまくるいきほひに螢とひ入る窓のうちかな 福岡 十時 吉男

涼しさを光にみせてたかとのいよすに一つほたるすかれる 東京 福田 喜代子

社頭螢

里やしろみたらし川の夕風にぬさとみたれて飛ぶ螢かな 同 松本 美徳

庭前螢

はしゐして月まつ庭のまさ水にかけをうつしてとふ螢かな 山形 田澤 とみ子

水邊螢

池水にかけをうつして渡殿のおはしま近くとふほたるかな 茨城 打越 寅吉

都 螢

みとりこき都大路のやなきかけものめつらしく螢とふみゆ 三重 橋本 嘉十郎

雨中螢

飛ぶもありとまるもありてあはれなり雨夜の螢光しめりて 愛媛 小野 國三郎

雨後螢

雨はれて夜風すしき葉さくらの木の間にらしてとふ螢かな 三重 内田 ひさの

海邊螢

磯崎の魚見やくらに日は落ちて松はら暇ほたるとふなり 鹿島兒 津留 武彦

時 鳥

ほととぎす初めてきぬあへきつゝ登り來し路の山の宿にて 愛媛 石丸 菅郷

うつき咲く垣根にたちて夕はえのくもみて居れはなく時鳥 奈良 上田 正俊

初瀬山みとせつ、きて嬉しくも同じ日にきくほととぎすかな 臺灣 久保 一朗

かくまてに待ちつるものを杜鵑我にはなとてつれなかるらん

東京弘田由己子
陵をなれも拜むかほととぎすをちかへりなく多摩のよこ山

同丸尾初子
待ちてさく心ならねと一聲をわれにももらせ山ほととぎす

茨城菅沼初子
古寺の庭のをくらさ葉さくらの梢かすめてなくほととぎす

客舎聞杜鵑

栃木村田雄次郎

さらたに寂しきものを杜鵑なとたひねをはおとろかすらん

深山郭公

岡山梶村よし江

こえかねてはしいこへる山道のみねに一聲ほととぎすなく

海路聞時鳥

長崎鴨川祥司

かつを舟いさみてかへる夕くれの雲のはたてになく時鳥

時鳥稀

兵庫村田くに子

つれなくもいつちゆきけむ時鳥たゝ一聲をくもにのこして

名所郭公

群馬金井源一郎

ほととぎすなきてその名も名所とよに知られたる白雲の峰

軍營時鳥

鹿児島本田親清

ますらをか守るとりてをさやかにものりてすくるやま時鳥

山時鳥

千葉木村重郷

よしの山たつねきませとほととぎす落文して人をさそへる

曉時鳥

福岡友清耕吉

曉のとりの八聲にひとこゑをそへてすきゆく山ほととぎす

時鳥一聲

同河野修造

さみたれのふる屋の軒にひとこゑをもらしてすくる時鳥かな

深夜時鳥

宮城吉田修子

ほととぎす心しつかにきけよとかよふかきいほをすくる一聲

夏溪

三重福井太男

清水わく谷ふところに庵しめてこのひと夏をすまんとそ思ふ

愛媛 長井 うちた子

大分 角あき子

愛知 小島 承範

佐賀 南里 虎生

宮崎 野村 郁子

愛知 山本 萬太郎

山梨 新海 信

瀧壺のしふきにぬれて涼しけに谷の白百合はなにほふなり

東京 早川 蝶子

愛媛 西原 義任

長野 田中文 太郎

徳島 石丸 伸二

京都 竹内 宣義

島根 平井 常四郎

東京 尾澤 璋子

五月旅

九八

さみたれの雲までもるゝ日の光見てなつかしき旅の空かな

兵庫 真垣 庠之助

夏 曉

有明の月を残してよしきりのこゑに明けゆくなはて涼しも

青森 宇野 要七

夏 朝

さら／＼と海に陽のてるひと時のひかり眼をさす夏の朝かな

布哇 丸谷 秀岳

とくちきて庭の芝生の露ふむも夏のあしかの樂しみにして

茨城 郡司 篤則

黒金をとくすはかりの暑き日もさすかに朝は涼しかりけり

同 吉見 輝

朝またき露にぬれつゝ里の子かまくさかるなり夏の廣野に

福岡 岸壽 美雄

旅人のたもとにかるき風みえて夏のあしたは涼しかりけり

愛媛 二宮 泰子

千葉 北川 善治郎

戸をくれば蚊のなく聲のきえゆきてそよ風涼しなつの朝とて

秋田 早坂 節子

朝戸あけてありたつ庭の池の面にはちすの花のひらく音する

東京 小林 富次

夏 朝露

山畑のいもの葉わたる朝風によあめのあとの露そこほるゝ

新潟 板垣 五左衛門

田家朝

朝またきまくさかる男のさとうたに馬もきほひて高いいなゝく

長野 西野 入禎一

行々子

梅雨のはれて涼しき川そひのあしまかくれによしきりの鳴く

東京 石井 擴

うはらさく野川の堤月ふけて淋しくなりぬよしきりの聲

愛媛 下司 安吉

短夜の月かけ白む曉にせとのたかやふよしきりのなく

夏 之 部

九九

水 雞

さしもせぬ吾柴の戸をしはくも更て叩くはくひなふるらむ

夜水雞

川沿ひにまたねぬ宿の燈火のまたくみえてくひな鳴なり

夏 鷺

おもたかの花さく池にあり立ちて何漁るらむ白鷺のみゆ夏

夏 鳥

稻葉ふく風にみのけをそよかせて涼しけに立つ小田の白鷺

初 夏

きのふまで霞よそひし山々の青葉若葉に風かをるなり

初 夏

今年竹卷葉なからにかきねよりぬけて出てたる夏すかた哉

初 夏

バラソルの色もひとしほはえにけり緑したる葉櫻のもと

長野 西尾直治郎

山口 中島光子

兵庫 市岡虎象

福岡 由比顯次

三重 竹島定吉

高知 野口元七

千葉 岡野安藏

東京 山崎翠葉

東京 渡部節子

秋田 下遠重遠

茨城 橋本直人

福岡 中尾林藏

大阪 片山良到

山口 西村常子

郭公なくねに耳をかたむけて青葉にそく雨のおとさく

夏 之 部

初夏朝雨

福島

金

澤

六

郎

一〇二

朝はれの虹のたか橋かけ消えて又ふりいたす初夏のあめ

夏 雨

兵庫

松

谷

庄

藏

早苗田の畔にかをれる野うはらの花をちらして夏の雨ふる

喜 雨

同

野

口

きの

ゑ

しをれたる草木のみかは人さへもよみ返りたる夕立のあめ

福岡

出

光

松

壽

民草の真心かみもあはれみて稻田に雨をふらしましけむ

夏 波

東京

篠

田

時

化

月影をみきはよせてひき返す波に暑さも残らさりけり

夏 磯波

静岡

岡

山

崎

六

白浪の花さく磯の松かけにあそぶひと日は夏なかりけり

枝 豆

福島

佐

藤

道

衛

なつやすみ都の子らの歸りこむあすは枝豆ゆてゝまたまし

汗

同

同

人

清水わく大木のかげに足とめて馬の汗ふくまこそゆかしき

木 蔭

岩手

清

水

文

四

もち竿を持ちてたゝすむ子らも見ゆ蟬の聲する松の木かけに

遠 雷

福岡

井

上

つ

ね

まち／＼し夕立それで里遠くたゝ鳴神の音のみそする

蓮 田

岐阜

山

岸

田

鶴

朝風にかをり流れてはちす田の花は見るまに咲きいてにけり

單 衣

島根

伊

豫

つ

る

水色に秋の七草そめわけしをとめのひとへ涼しかるらむ

夏 獸

石川

北

浦

一

郎

つはものゝ糧をは運ぶなつの馬あせなすいさを人にゆつらす

暑

静岡

岡

伊

藤

日

ひるのまの暑さをよそに遣水の音のすゝしき松のしたかけ

夏 之 部

一〇三

夕 風

みとり子かいねかてにする暑さかな蚊張もゆるかぬ夕風にして

夏都人

山口 吉村まつ子

都人あつさのかれて集ふなり夜風すしきかものかはらに

曝 書

兵庫 川村若松

なき父の歌の一卷見いてけり蟲ほししたる書のなかより

鯉 幟

茨城 新莊真次郎

榮えゆく君か千代田のさつきはれ雲井になひく鯉のほりかな

苦 熱

宮城 馬淵誠敬

時のまにする墨さへもかわきけりいかにきひしき暑さなるらむ

日 照

千葉 大橋喜知二

田人らはつくく日照りに涙さへかわきはてたるやつれ顔にて

紫陽花

同 橋本宗次郎

紫陽花のいろはひことに變るなり人のこゝろもかくやあるらむ

夏 浦

宮城 和泉丈三郎

涼み舟けふもみえけり松島のしまめぐりする人をみたして

夏 蝶

同 齋川まさ子

朝風にとひたつ蝶はなつ草にみはてぬ夢のあとやおふらむ

蝙蝠

兵庫 墨井兼也

蚊やりたく軒端に淡き三日月のかけをかすめてかはほりのとふ

蜻 蛉

岡山 木下利冬

よしの葉にあきつとひきて休らひぬいさし川邊の夏の日さかり

夏 窓

宮城 白幡清一

月のかけさす窓すし夏の夜は竹の葉さやくかせもかよひて

千 葉

千葉 伊藤藤信次

トンネルを走りいてたる汽車の窓あくれば清き百合の香のする

福 岡

福岡 伊東憲一

やく如きなつのあつさも忘れけり書よむ窓の竹のした風

つりしのふ風にゆらけは風鈴のおともすしく窓に入りくる
三重山 川 薫 三

いはまより清水流るゝ音のして木かけ涼しき山てらのは
兵 庫 前 田 勝 子

風鈴の音にひるねのゆめさめて照る日に庭の青葉まはゆし
石 川 野 木 愛 子

夏の夜は門そにきはふ更るまで涼みかてらに將棋さしつゝ
新 潟 大 谷 徳 兵 衛

蒲の穂にとまるかはせみとひたちてひる静かなる山寺の池
山 口 吉 富 廣 介

竹の臺しらへ妙なるものゝ音の青葉のかけにもるゝ涼しさ
東 京 紫 芝 澤 子

かさなりて峰なす雲のくつるゝを風まつ窓に見るゆふへかな
夏 眺 望 京 都 大 前 壽 夫

名所鵜河

にけまとふ鮎を見えける長良川うふねのかゝり底を照して
福 岡 梅 田 八 重 子

吹きとほす風の涼しきいよ籠てる日さへきるものとしもなし
大 阪 戸 田 熊 子

裏庭に竿のおとすなりうならか又忍ひきて梅やとるらむ
東 京 土 肥 孝 子

ほととぎすなのり出てにし奥山をひとり守りて鶯のなく
高 知 土 井 原 忠 家

河鹿なく聲もすゝしき瀧川にうつりてにほふ藤波のはな
岡 山 久 郷 せ じ 子

あつき日も風にもまるゝ青柳は涼しきいろをひるかへしつゝ
兵 庫 菅 村 武 救

むきの穂の風に波たつ畑中に一本たかくきりのはなさく
桐 花 同 草 野 藤 次

盛 暑

幾度か庭の木かけにおりたちぬむさるゝ如き今日の暑さに

暑き日に

山形 大山 太次郎

しほるほと汗にぬれたるつはものか軍ならしやいかに苦しき

大 被

静岡 井上たけい子

おこそかに祈りさゝけて大被ひつかへまつれる心やすけし

夏古寺

榊太 西村 如松

夏草のちひしけりたる古寺は法の道さへうもればてけむ

午 睡

東京 武富須美子

袖人ら青葉のかけにぬふりけりひるけの器まくらにはして

夏 松

同 鈴木隆之助

日にやくる濱のまさこちふみわひて幾度松のかけによりけむ

麥 刈

奈良 大倉 恭助

賤の男かいそしむ程も刈る麥の穂に現はれて豊けかりけり

福島 武藤 重雄

雨後蓮

夕立のなこりの露をかさしつゝ涼しけにさく花はちすかな

夏座敷

熊本 江上 信恵子

あけはなつ室は涼しもうち渡す青田の風の吹きとほしにて

夏山藤

三重 犬飼 瞻法

おりたちてむすふ清水にうつりけり谷のいはほにかゝる藤波

夜納涼

宮崎 龍岡 清子

あつまやの鈴吹く風の音趁ひて白きひとかけ暗によりくる

東京 大町 五城

秋 之 部

秋 鐘

東京 千葉 胤明

木のこころ谷のこたまにひしくなり歸りうなかつ山寺の鐘

巖頭菊

同 鳥野 幸次

葛の葉も紅葉するまで秋更けて白菊さけれり谷のいはかと

秋 之 部

暮秋庭

色あせし千種の庭に月雪のなかめをつなく白菊の花

同

武島又次郎

秋天

むらとりのをり／＼渡る影見えて高くそすめる秋の天空

同

遠山英一

残月

ものかきの筆ををさめて窓あせははつかにさしく片割の月

同

金子元臣

山路霧

木曾山の朝さりかくれきこゆなり道になれたる馬の鈴の音

同

加藤義清

蟲聲

さかしらに物語りする人よりも人をうこかす蟲の聲かな

同

外山且正

朝顔

白露のかわかんまてをいのちにて垣根に匂ふ朝顔の花

同

高橋佐十郎

あれはてゝ人なき庵の古垣にやせて咲きたる朝顔の花

同

新井徳之助

新鴻吉原與吉

定めなき露のいのちにくらふれば盛り久しきあさかほの花

群馬

羽島榮治郎

朝な／＼老かねさめをなくさめてませ垣にさく朝顔の花

新雁

山口

高崎さわ子

秋きぬとつれさす夜を新雁の夜寒をつけてなき渡るなり

曉初雁

福島

佐藤由之助

此ころの曉あきの風さむしうへこそ來なけ衣かりかね

月前雁

茨城

宮本松之助

さやかなる月のひかりに數見えてはねうちかはす雁の一つら

秋の鳥

静岡

横山健吾

くえ彦の立てる田面も目になれて穂波にさわく村雀かな

東京

藤田よし子

朝またき庭の木立をつたひきてなにあさるらんはほしろの鳴く

うちむれてとひし雀は八束ほの稻田の上に落ちて消えたる
三重川邊彌三郎

秋曉鳥 宮城立花泰隣

初秋のたよりを告げて朝ほらけ高ねをこゆる雁の一つら

渡鳥 長野河野金四郎

はれ渡る秋のみ空の渡り鳥野こえ山こえいつこゆくらん

野小鳥 東京大浪安民

はやふさの影や見出てし野に遊ぶ小鳥の群は身をひそめけり

曉の鹿 大阪桑川仙魚

月は落ち峰の松風静まりてさやかに聞こゆさを鹿の聲

深山鹿 香川佐野幸太郎

月しろに浮たつ峯のかなたより妻戀ふ鹿の聲のきこゆる

鹿音漸遠 旅順今村龍城

竿鹿は今や峠を越えつらむ一聲ことに遠くなりゆく

秋 雲

熊本田上今太郎

夕日さす空をあふけは山雲にもみち葉はえて秋はふかめり

神奈川 穴戸與三郎

水底にうつりて清しすみ渡る秋の空ゆく雲の一ひら

佐賀 永田關三郎

後になり先になりても行くかりの聲までかくす空の白雲

福島邊 見綾雄

をしねほす日もなかりけり雨雲はたえす越路の山をこえきて

滿洲米山 元

ふく風の音もかはりて大空にきれく浮ふ秋のくも哉

秋 空 大分塚田武徳

飛行機の飛行く音も心地よくすみ渡りたる秋の大空

岡山浅羽春之

あきつよりちひさく見ゆる鳥のむれ高くとひゆく秋の空かな

秋 川

熊本坂

一二四

本隆知

もみち葉の下てる影にさひ鮎のくたるも見ゆる秋の山川

愛知安

田徳篤

千町田の水口おとす捨水にかた濁りせり秋のさと川

秋山畑

岡山久

郷せむ子

紫の玉をつらねてゑひかつらさかりとなれる甲斐の山畑

秋霜

東京小

田毎子

蝸牛落葉つたひし跡とめてうすく光れる秋の初霜

秋時雨

大阪小

山光子

ちり残る一本紅葉さそひ来て秋の末野に時雨ふるなり

秋夜

大分中

野綾子

はきの葉に置き添ふ露も蟲の音も月にすみゆく秋のよは哉

鳴く蟲の聲をきくつし

岡山楠

見建太

鳴く蟲の聲をきくつし絢ふ繩の長くなりゆく秋のよは哉

秋立つ日

東京濱

村梅子

秋立つといふその日より吹く風も涼しくなりぬ蟲の聲まで

秋橋

千葉山

田詠一

田人らか背負ひて運ふ稻束に渡るもせまき里川の橋

秋曉旅立

岡長

岡熊雄

夜をのこす蟲の音やみぬかしま立かるき身なりのわか足音に

茸狩

岩手市

野川素温

嬉しとも嬉しかりけり秋山に親しき友とたけかりをして

松茸

静岡大

塚近子

折よくもあまた狩得て嬉しさも木の子も籠にあふれつる哉

苧萱

和歌山森

くす子

一もとをつとに手折らぬ苧萱の野邊の姿を瓶にみるへく

水邊秋

愛媛石

村清一

すみ渡るみ空のうつる里川の片岸しろし野菊かをりて

落 鮎

いつしかと岸の柳の影やせて鮎そちちゆく里の川せを

兵庫 竹本をつた
東京 石井 擴

山川の築のえものと我友はもみち葉そへて鮎をおこせる

三重 山川 董三

あしの花ちりくる川の水すみておちゆく鮎の影も老いたり

富山 名苗 織平

山川のよとみに秋の色すみておちゆく鮎のやなと見えける

山口 高野 政枝

山川のきよき早瀬を力なくおち来る鮎の白きはらみゆ

三重 岡玄 道

つた紅葉影をひたせる山川のせしをぬひつゝ鮎のおちゆく

兵庫 高木 光江

露に伏す草生の蟲の聲さえて月も匂へり野邊の萩原

兵庫 高木 光江

心してゆけと盛りのはきはき原袖うちふれて花のちりかふ

東京 小澤 玉子

秋ことに思深くも匂ふかなうつし植ゑたるみやきの萩

宮城 菊田 千代乃

白露の玉をつらねてうるはしく染めわけてさく萩の花かな

群馬 小保方 榮治郎

もちの夜のすゝきに添へんたま川の砦の里の萩の一枝

東京 吉村 重子

名も高き狸の塚に萩さきて昔はなしの月夜すゝしも

千葉 伊藤 信治

露よりもろくこぼれてあはれなり盛りすきたる秋萩の花

群馬 星野 竹男

夕露も心しておけさなきたに枝のたわめる庭の糸萩

岡山 山田 幾子

路 萩

いつの間にわれは來にけむ昨日來しおなし道なり萩の花道

島根 長崎 仁子

汐あみて歸り來ぬれは我宿の庭の秋萩さきそめにけり

京都 井關 永成

萩を折る

大分 落合 田鶴子

なく蟲の宿としきけは一枝も手折るはをしき秋はさきの花

閑居萩

兵庫 庫加 藤新 吾

人とはぬいほこそよけれ通ひちをさきうつみたる秋萩の花

野 萩

岡山 山甲 賀新 八

こゝかしこ蟲の聲して廣き野にさき亂れたる秋萩の花

萩花散

兵庫 庫川 越陸 子

苔生より小鳥とひたつ羽かせにて萩の花ちる庭のかよひち

霧

福岡 岡中 尾林 藏

霧深き山路こゆれば冷やかに杉の下露えりにおちくる

北海道 栗賀 祐之

不二の峰は見る／＼高く現はれてふもとに残る秋の朝きり

曉 霧

福岡 岡澤 麟太郎

ところ／＼谷間のわらやほの見えて夕の風に霧なかれゆく

朝 霧

三重 福田 豊城

たちこむる霧にみ寺は見えねとも曉つくる鐘そきこゆる

朝 霧

東京 織田 みを子

伊豆みさき霧にかくれて波はかり朝陽にひかるかまぐらの海

夕 霧

大阪 小澤 包子

尺八の流しさひしき虚無僧の夕霧ふかき町にきえゆく

山 霧

愛知 村瀬 市次郎

石山は霧にかくれて三井寺の鐘のみ渡る世田の長はし

田上霧

宮崎 野村 郁子

つらなしてとひこし雁も迷ふらむ里の千町田霧深くして

都 霧

神奈川 西

久 子

松のみをうすく残してさくら田のみ堀も見えぬ秋の朝きり

川 霧

東 京 宮

坂 武 雄

ひとつきえふたつかくれぬま帆片帆利根の川面霧ふかくして

朝ほらけ下す

富 山 南

喜 作

朝ほらけ下す後のかすみえて霧うすれゆく木曾の川つら

露

岡 山 正

木 義 仁

秋萩の枝もおもけにたわみけりおく白露のあまりしけくて

秋 露

東 京 西

山 山 子

手にとれは消ぬへきものとしり乍ら尙さはり見る草の葉の露

曉 露

宮 城 白

幡 清 一

曉の月の光に露みえておもけにたわむ秋はきの花

朝露滋

東 京 藤

村 篤 子

二つ三つけさ咲きそめし白萩の枝もたわゝに結ふ露かな

萩 露

千 葉

稻

垣

治

ありたちて手折りてもみむ置露に月の宿れる絲萩の花

露 宿

岩 手

鈴

木

小

七

郎

手もふれすこのまゝ神にさゝけはや小笹に宿る露の白玉

秋田露

京 都

平

川

三

郎

八

山田守る翁の袖や寒からむ稻穂たわゝに結ふ白露

田上露

三 重

稻

垣

己

三

郎

散れはまたあとよりおきて白露の恵みある世を稻穂にそ見る

同

橋

本

嘉

十

郎

日にそひて秋の深さそ知られける稻葉における露のしけきに

茨 城

高

木

葵

心

おく露も重けに見えて小山田の足穂の波は豊なりけり

初秋雨

山 口

柏

村

喜

久

子

窓ちかきはせをのやれ葉風ふきて夕へ淋しく村雨そふる

新秋雨

うき秋を早くも人に思はせてはせをのやれ葉雨のうつ音

秋 雨

茸狩のをとめのむれを驚かし秋の山路に村しくれふる

田家秋雨

もみむしろ廣けては又とりいれぬ秋の時雨のさためなれば

夜秋雨

うちわふる心もしらて秋の夜の寝さめにたしく窓の村さめ

暮秋雨

コスモスの花もしをれてゆく秋の淋しき庭に小雨そほふる

やつれたるふきの廣葉に音たてしくれゆく秋の雨そ淋しき

刈りあとの稻のひつち穂すゑ枯れて雁鳴く小田に秋雨のふる

兵庫 鎌谷 又三

福岡 井上 つね子

福岡 中牟田 華仙

島根 三原 泰吉

福岡 辻光 子

神戸 戸田 村てう 子

和歌山 田村 和夫

初秋野

萩すゝき花には早き野の夕秋いそかせて鈴蟲のなく

秋 野

秋更けて野邊の千草はあせぬるをひとり時めく白菊の花

山梨 腰卷 豊丸

すみ渡る小鳥の聲に八千草に秋は野山そ人の目をひく

石川 山本 嫩子

八千草の花さき匂ふ秋の野はたかちり出す錦なりけむ

鹿兒島 菊地 經文

とり／＼に皆面白し秋の野の花のいろ／＼蟲の聲々

神奈川 平準 彌

馬追の壁にとまりて晝もなく軒の干菜に風そよくみゆ

京都 都築 平次郎

秋深き露の一夜をつまこひに鳴き明すらむ蟲のあはれさ

大分 藤永 宣義

聞 蟲

三重 坂

倉 廣 生

ゆふかくらつかへまつりて神垣にかりきぬ乍ら蟲の聲きく

さま／＼に鳴く蟲の音を静かなる夜半の枕に集めてそきく

おのかし／＼秋をうたへる蟲の音をいかに聞くらむ床に病む人

八重葎しける庵のひとりねをなくさめて鳴く蟲のこゑ／＼

人の世のうさにならひて鈴蟲も鳴き明すらむ庭の草むら

窓近き蟲のなく音の面白み歌まきふせてき／＼ふかしけり

中垣はあれとへたてぬ蟲の音にとりの人と語りつゝきく

一三四

ゆふかくらつかへまつりて神垣にかりきぬ乍ら蟲の聲きく	和歌山	江尻	一枝	子
さま／＼に鳴く蟲の音を静かなる夜半の枕に集めてそきく	京都	多氣	巖	伯
おのかし／＼秋をうたへる蟲の音をいかに聞くらむ床に病む人	三重	重竹	島	定吉
八重葎しける庵のひとりねをなくさめて鳴く蟲のこゑ／＼	愛知	知渡	邊	萱則
人の世のうさにならひて鈴蟲も鳴き明すらむ庭の草むら	群馬	馬木	暮	好文
窓近き蟲のなく音の面白み歌まきふせてき／＼ふかしけり	大分	分龜	井	増治
中垣はあれとへたてぬ蟲の音にとりの人と語りつゝきく				

静かなる秋の夜長にさく蟲の聲あはれなり寒さそはりて

東京 高山 良寛

月前蟲聲

茨城 長沼

成 美

ねやの戸はさしれさり幾月もよし蟲の鳴く音も更けて尙よし

窓前蟲

滋賀 吉田

虎之助

はなちにし蟲かあらぬか今宵また窓の外近く同じ音に鳴く

蟲聲近枕

新潟 齋藤

賢 作

思ふことなくてねふれるたまぐらの近くに歌ふ蟲の聲かな

月下蟲

東京 遠藤

惣次郎

月影の光と共にちる露の玉より清き蟲のこゑ／＼

愛知 石黒

み 子

蟲の音も野よりつゝきて月の夜は我庭廣きこゝちこそすれ

同 山

本

修

蟲の音はいよ／＼清し草村の月の夜露にぬれてみかきて

さえ渡る月にきほひて草むらになく鈴蟲の聲もすみなき
埼玉星野安

神苑蟲

高知土井原忠家

うかれそく神もきくらむ月影の清きみ園に蟲の鳴く夜は

茨城高木吉太郎

すめ神もきこしめすらむよをこめて月になつる蟲の樂のね

蟲聲

東京山崎翠葉

月影のみてるよなかの草むらは蟲の鳴く音も盛りなりけり

曉蟲

同 兒玉猪熊

夜もすから鳴きつかれけむ曉の聲おとろへる庭のこぼろき

野蟲

静岡小林信一

訪ふ人もあらぬ廣野の草村にたれまつ蟲の鳴き明すらむ

秋の蟲

布哇吉澄保

静けさを小暗き庭の垣根より鳴きて聞かす蟲の聲々

旅宿蟲

東京入山れき子

夢さめて思ふともなく家おもふ旅寝さひしき蟲の聲かな

同 押田よの子

旅やかた枕邊近き蟲の音はるすもる子等のさゝやきに似て

穉中蟲

兵庫野口喜熊惠

旅やかたつれさせてふ蟲の音にいと家路の急かるゝ哉

蟲あはれなり

熊本江上信惠子

秋の夜の更けて淋しき草むらに鳴きよわりゆく蟲哀れなり

蟲賣

茨城打越寅吉

うりありく蟲の音さけは市なかも露けき野邊の心地こそすれ

京都市田富藏

露よりもはかなき蟲の聲うりて浮世を渡る人もありけり

鈴蟲

兵庫渡邊千榮

葛の花風にゆるるゝ山蔭のしはふにひるも鈴蟲のなく

籠 蟲

このうちに夕月影のさし入りてさやかになりぬ鈴蟲の聲

庭 蟲

京都 竹

内 幾

子

ところせき庭のあさちによもすから露を命の蟲のこゑく

蟲 選

兵 庫 木

谷 壽

子

何れをか甲に選はむ鳴く聲のあはれは同じ籠のすゝ蟲

紅 葉

北海 道 山

下 み

す ゑ

初霜のちきてけさ見る山々は紅葉してけり秋更けぬらし

山 口

富 廣

介

みたらしを溢るゝ水の音すみて紅葉かつちる神の廣前

兵 庫 竹

下 悅

一 郎

をしみつゝ山をくたりて見かへりぬ夕日にはゆる岨の紅葉は

群 馬

小 林

文 平

てりかへす夕日の影にみやま路の草の紅葉も深くにほへり

群 馬

小 林

文 平

福 岡 伊 藤 憲 一

深山邊は一日一日にうすくこく時雨に染まる紅葉はの色

群 馬

未 至 磨 大 洲

妙義山もみちのにしきよそほひて秋は都の人をよふなり

神 奈 川

清 水 圓 次 郎

たちのほる出ゆの煙とりかこみもゆるか如き山の紅葉は

三 重

伊 藤 み の 子

秋時雨いくたひかけて染わたすもみち美し山寺のには

愛 知

小 島 承 範

谷川の水の中まで高雄山いろをうつして紅葉しにけり

宮 城

塚 本 梅 治 郎

うちわたすふもとに見ゆる一つ家の柿の紅葉は美しきかな

三 重

横 山 宗 顯

露にぬれ時雨に染て此所の森かしの林もみちしにけり

夕榮の雲てりかへす袋田の瀧にうつろふ紅葉うつくし 茨城 新莊直次郎

見渡せば杜も林も紅葉して秋はにしきの大和國原 奈良 久保良祐

ふきおろす峰の嵐に紅葉はのおつる下みちふまなかたなし 静岡 前田良平

瀧つせのしふきのかゝる巖にもはひまつはれり葛の紅葉は 山形 伊藤忠夫

秋ふかき木曾のみ谷のつり橋に力そへたる葛の紅葉は 東京 坂本要介

心なきしつはをしねをかけほしぬ紅葉匂へる櫨のしつ枝に 東京 堤義勇

花よりもうつくしきかな鳥栖久留米はたの櫨の木皆紅葉して 福岡 生田仙松

柞 岡山 駒井縫次

足ひきの山田のおくてかりはてははしその紅葉色のあせたる 東京 松浦英子

うりのつる枯てまつはるうら畑の垣根にはゆるたて紅葉かな 福岡 園山尊篤

あれ庭の蓬か中のたて紅葉春の花より人の目をひく 京都 山岡喜美子

いぬたての紅葉うつくし錆あゆのくたる野川に影をうつして 福岡 西川續子

武士か軍ならしの秋の野に色美しきたての紅葉は 磯紅葉 岡山 間野尙明

秋深き色をみせけりもみち葉は谷の流ににしきうつして 愛媛 河野玄要

山風にちるへき紅葉手折り来て床に幾日のにしきかさりつ 秋之部

古寺紅葉

一本の松をのこして山寺の庭の楓は紅葉しにけり 福岡 内山 小源次

庭紅葉

夕日かけ庭のもみちを照りかへしつねには暗き窓もあかるし 徳島 石丸 伸二

満庭紅葉

みとりこき松を残して庭の面に夕日まはゆく照る紅葉かな 東京 福田 喜代子

紅葉映水

うろくつも錦かつくと見ゆるかな岸の紅葉は水にうつりて 佐賀 野崎 斧雄

山紅葉

一汽車はちくるいもし見てゆかむ高尾の山の峰の紅葉を 東京 千早 正善

谷紅葉

さをしかの聲もきこえて紅葉谷もみちも月に照る夜なりけり 兵庫 庫堀 見雅信

水邊紅葉

板井くむ母におはれし幼子の顔さへ染めててる紅葉かな 鹿兒島 蕨野 盛夫

朝紅葉

朝日さすこあらた山の紅葉は、我里かさるにしきなりけり 群馬 石原 春吉

岡紅葉

色のなき雨にそまりてこゝかして紅匂ふ岡のもみちは 静岡 岡清 高彦

社頭紅葉

ときは木の中に交りて美しく廣前かさるもみち葉の色 新潟 鴻齋 藤鍾太郎

壁紅葉

はひかゝる鳶の紅葉に少女子の縫ひとり見する賤か家の壁 福島 渡邊 千秋

都紅葉

玉敷の都大路もしかすかに秋にはもれす紅葉にしけり 岡山 中山 寛

隣紅葉

中垣のへたてをこえてちりくなり隣の紅葉梢はなれて 福島 秋月 まし子

神園紅葉

民草の心の色の紅葉はをみもすそ川にうつしてそみる 三重 阪野 嘉一

菊

新 潟 江

部 大 作

一三四

大御歌床にかゝけて一もとの菊をいけたりみ代祝ふとて

靜 岡

飯 田 耕 一 郎

菊の花さきそめしより我門に足をとゝむる人そおほかる

福 岡

三 輪 則 一

かすくの菊は作れと一枝も切りて賣らむと思ふ花なし

東 京

野 村 鹿 子

はきはちり尾花は枯て我宿の垣根はひとり菊のしめたり

福 井

細 井 昌 祐

ふく風に圃の白菊ほゝ笑みて香につゝまるゝ草のいほかな

東 京

渡 部 節 子

芭蕉葉に霜をしのきて菊の花冬を飾るもあはれなりけり

群 馬

劔 持 と う 子

手折りきてみおやの神に捧けりけかれをしらぬ山の白菊

岩 手 藤 澤 秀 泰

ささかけて咲く花よりもおくれたる霜夜の菊はなつかしき哉

東 京

土 肥 孝 子

からかさ霜よけにして尼寺の静けき庭に菊の花さく

宮 城

内 馬 場 文 彌

白菊のさける真垣はてる月のひかりも匂ふ心地こそすれ

岡 山

木 下 利 冬

大みのりあけます頃を盛りにてきくもうれしき今年なるらむ

熊 本

山 田 愨

築山の岩をかさりてさく菊の花の姿のおもしろきかな

石 川

渡 邊 と よ 子

やせて咲く姿け高し苔むせるいはほに根さす白菊の花

岡 山

秋 山 舜 造

山川の岸にそはたつ巖の上にけたかく匂ふ白菊のはな

天狗岩こしくたてる胸つきに美しくさく野菊ひと本 兵庫 小島 羊古

うちよする波にひたりて面白きいはほにたてる白菊のはな 長野 後藤 金一郎

岸頭菊 青森 松本 勘吉

秋深み河添柳ちるかけに霜をあさむく白菊のはな 京都 安田 ゆか子

山路菊 京都 安田 ゆか子

あへきつゝのほる山路の松影に千代の香しむる白菊のはな 茨城 堀川 倉四郎

山人もまれに通へる谷あひに秋深くして菊の花さく 東京 早川 蝶子

野路菊 東京 早川 蝶子

香もさよし色も美し野路の菊いはらの中に咲きまされとも 山口 紀藤 まき子

投げいれの小瓶の野菊面白し尾花一もとひかへにはして

菊花盛久

八千草の枯るゝ冬しも白菊はいつまで秋の心なるらむ 福島 武藤 重雄

おのつから千代の根さしと咲きいてゝ盛りひさしき白菊の花 岐阜 日下部 西子

くみあくる岩井の水もかをるなり菊の花さく山蔭のいほ 佐賀 出雲 侃

閑居菊 長崎 森下 初音

一人住む身にも友ある心地して朝夕めつる庭のしら菊 東京 阿部 復馬

自裁菊 東京 阿部 復馬

朝夕に心つくしのかひありて見事に開く白菊のはな 臺灣 飯田 實哉子

ゆるやかに流るゝ小川こえゆけは一ひら野菊うつくしく咲く 富山 荒木 諒雄

ひとゝせの花のをはりを一垣の菊に集めてみるそのふ哉

人丸神社菊

兵庫有

永常子

菊の花匂ふもうれし言靈の神のひろまへ秋ふかくして

月

静岡岡

五十嵐直喜

心までてらす鏡とみゆはかり晴れ渡りたる月の影かな

大阪

上島松之助

大空は雲なくはれて豊にもみのる田面をてらす月かな

布哇

三池平三

眞萩はらたまなす露になく蟲のこゑもすみゆく秋の夜の月

新潟村

田歌城

浮雲のかけたにあらぬ大空にかゝれる月の光さやけき

秋月

東京浅

田近子

秋の夜のすみたる月をなかめつゝ海邊に立ては潮のみちくる

大阪山

住今子

おしなへて月の光りとなりにけり千草に宿る野邊の夕露

茨城大貫隆正

稻刈りて歸る田中のほそみちをさやかに照す秋のよの月

同池

水浩光

すみ渡る月の光をやとしつゝ草葉にむすぶ露のしら玉

福井

細井昌祐

うらさふる心も須磨の夕波に光りたゝよふ秋のよの月

月を見て

東京務

川眞佐榮

かたらねと心おきなき人に似てなつかしきかな月に向へは

月明

大阪谷

川マツ子

あさちふに鳴く蟲の音も中空の月も更けゆく秋のよは哉

月影

山口安

井寛

雨晴れて水の溜れる庭石のくほみに月の影のうつれる

社頭月

神奈川

尾上条次郎

男山松の上より弓張のつきかけきよく照りわたりつゝ

秋之部

兵營月

蟲の音を馬にふませていくさ人歸るたむろに月ふけにけり

田家月

かとの田の穂波さやかに見ゆるなり風さへすめる秋の月夜は

月明千里

大空の千里をかける飛行機もやすけかるらむ月のてる夜は

松間月

霧はるゝ高嶺の松の木の間よりみかきし如き月そいてたる

仲秋月

まちわひし人の心を大空に集めてすめる望の夜の月

中秋無月

なつかしき故郷人もまとゐして今宵隈なき月やみるらむ

待つかいもなく

朝よりふり出てし雨にくもれる望の夜の月

三重 玉

崎 光 起

三重 岸

田 治 雄

長崎 水野尾忠三郎

長野 池上久太郎

大阪 田口このゑ

神奈川 中村榮之助

宮城 早川ちやう子

江月冷

江を渡る舟のともしひ影消えて唯ひやゝかに月そてらせる

杜月

そまにか流す筏に照る月の影こそほれありなれの川

海上月

村雨のしつくの森の月かけはぬれてさやけき光をふらん

夕つゝの波に

さらめく影さえて月こそほれ沖の島山

舟のゆく瀬戸の内海月

すみてまつかせすゝしいつく島山

ふる里の夢をのせつゝ

ゆく船の窓にさし入る秋の夜の月

心なき人もみ空を仰くらむ

秋の最中の月の夜ころは

東京 柳下くら子

山形 三浦貞啓

宮崎 戸高喜千藏

愛知 角田ともゑ

熊本 相賀春雄

富山 沼田ゆき子

東京 藤澤千枝子

野邊月

東京 紫芝澤子

わか心うつろの如して月鳴く蟲の音にたどる野道は

山月明

靜岡 井上たけい

山畑のそはの花白くみゆる哉しもをふくめる月のひかりに

野月

同 山崎六女子

いとすしきまねく野道を只一人通るは淋し月はさせとも

茨城 柏崎やす子

嵯峨の野の昔のことはしらねとも哀れにすめる秋の夜の月

新月

福島 佐藤道衛子

たそかれの空にをとめのまゆ墨をひく如清しみか月のかけ

月水にうつる

福岡 塚原たよ子

くるゝまで少女のくみし山の井に手まりの如き月そうつれる

對月

愛媛 大塚和勝

さやかなる月にむかへはあつから心も空にすむ心地せり

山月

靜岡 佐野みつ子

あしの湖にうつろふ影もさやかなり箱根の山の秋のよの月

雲間月

石川 富永良

折々にたなひく雲にみかゝれていよゝさやけき秋のよの月

待月

宮城 澁谷鐘次郎

歌むしろ友は揃へともちの夜の月は高ねにいたたのほらす

月下客來

愛媛 浦尾惟正

まとかなる月を見るたに樂しきを心のあへる友も訪ひ來ぬ

入江月

北海道 深井由井子

山蔭の入江は波もしつかにてまとかにうつる秋の夜の月

浦月

鹿児島 本田親清

こき歸る小舟もみえて久方の月さやかなり有明の浦

竹不障月

奈良 梅本藤助

垣一重へたてし庭の吳竹はしけれと月に障らさりけり

初秋月

秋たてとまたむし暑き宵ながら窓にさし入る月そ涼しき

千葉 本城 己之助

月入簾

ともし火をけせは簾の内までも面はゆきまで月のさし入る

熊本 稗方 幸子

月光寒

更けぬれば月の光の身にしみぬ夜露や霜とあきかはりけむ

東京 内之浦 三雄

暮秋

長月の名のみ残して露霜の秋もいまはとくれて行くらむ

東京 岡村 ちほ子

晩秋

いつしかに秋やふけて鳴く蟲の聲もかれゆく園の草むら

静岡 岡笹 間 貞子

山梨新海

秋深く鹿のなく音もきこえてきて山は錦のもみちきにけり

山梨 新海 信

暮秋山

美しと見しまに秋やくれぬらんはたか木となる四方の山々

秋田 柴田 金治郎

山はたに赤き柿のみ見ゆるまで木の葉もちりて秋そくれゆく
岡山 竹内 軍兵衛

秋風寒

伊吹山夕霧はれて姉川のかはらに寒き秋風そよく

滋賀 伊藤 保治郎

秋寒し

力なき秋のひかけをせにうけてあみすくあまに北風のふく

大分 芥川 澄子

秋の暮

散り残る柿の木の子の数へりて淋しかりけり秋の夕くれ

三重 辻 正八

秋時雨

夕日かけ残る梢になく百舌の聲きほはせて時雨そめけり

高知 長尾 良博

海邊秋時雨

染のこす梢のみゆる紅葉谷けふも時雨のめぐりきてふる

京都 竹内 宣義

秋初霜

月影のあまる光とふみ見れば初霜あきぬさとの板橋

三重 藤森 良寛

初霞

福井三

野文子

しは垣に一本のこるコスモスの花ふるはせて初霞ふる

秋晴

三重成

田三郎

うちわたす小田に黄金の波たちて空はみとりの色にはれたる

同松

島叶

黄金なす山田のをしね波なして風心地よき秋日和かな

大阪山

脇爲臣

をしねほす田人のかとの日當りに夢あたけく猫のねむれる

三重津

賀舜山

晴れ渡る秋のみ空をうつしたる池はさなから鏡なりけり

佐賀中

野万龜子

空高く見渡す限り秋すみて稻葉をわたる風かをるなり

福島齋

藤與之助

晴れ渡る日和つきの空を見て早稻刈る里の人のにきはふ

秋興

山口紀

藤織文

置く露にぬるゝも嬉し小山田のたり穂見めくる秋のあしたは

岡山横

畑圭邦

秋の野に遊ひくらしして八千草のよるの錦を月にみる哉

石川岸

馨子

長き夜を眺めあかしつすみ渡る月をまとの友に加へて

秋庭

東京鈴

木咲子

月もよし夜よしと庭の草村にたれを松むし鳴きかはしつゝ

同種

野信子

歌心うこき初めけり秋風のそゝろ淋しき庭をめぐりて

宮崎濱

田なほ子

白菊のにほひあふれてつくろはぬ我庭なからなつかしき哉

茨城内

田熊藏

秋晴れの山田の里は家毎にもみをほしたり庭せまきまで

とり入れしをほしたり秋日和家にいて入る道のなきまで
宮城 富士原 二郎

さひ鮎の下るも見えて衣あらふ手先つめたし門川の水
宮城 齊川 まさ子

すみ渡る空もうつりて底きよき水の心は秋にこそ見れ
同 笠原 良保

小山田のみな口落る水の音さくさへ今朝は心地よきかな
同 茂木 安勝

うきことのためて聞えぬ山里もけさは身にしむ秋の初風
山家早秋 富山 二宮 正義

なく蟬の聲も涼しくなりゆきて早や秋風の立ちそめにけり
立 秋 三重 内田 ひさの

あしの葉のそよく風さへ身にしみて秋をよひ来る雁かねの聲
秋 來 靜岡 林 文 昌

初 秋 愛媛 西原 義任

空高く駒も肥えたりこの日頃はけまさらめや里の若人
驚立秋 石川 藤本 純吉

いつしかと今年もなかは杉の門あところかしても秋風のふく
小春日 福岡 浅村 信作

紅葉見に菊見に心ひかれけり小春の日かけ暖かくして
秋 園 東京 秋元 良子

千草みなうらかれそめてもくせいの花の香高き園のうち哉
草庵秋 愛媛 森 琴子

つた紅葉かゝる大岩庭にして秋をしめたる草のいほかな
秋草庵 高知 野口 元七

前の野邊後の岡に鳴く蟲の聲の中なる草の庵かな
かしかをきいて 福岡 河野 修造

谷川の流れをとめてさす月の涼しきかけにかしか鳴くなり

女郎花

吹く風になひきそめたる女郎花尾花かもとに露をこぼして 佐賀平野良道

秋 暑

秋されと残る暑さのはけしさにまたすてかたき夏扇かな 兵庫庫兒島弘能

残 暑

まちわひし秋は來つれと日盛りの暑さはなほも夏にかはらす 同神村照子

ひくらしはしきりに鳴けと吹く風はまた秋としもなき暑さ哉

ひくらしはしきりに鳴けと吹く風はまた秋としもなき暑さ哉 奈良稻田主麿

日くらしは秋を告くれとまた残る晝の暑さのたえ難くして

日くらしは秋を告くれとまた残る晝の暑さのたえ難くして 佐賀木島繁太郎

夕日かけうするゝ谷の杉むらに淋しさそへて日くらしのなく

夕日かけうするゝ谷の杉むらに淋しさそへて日くらしのなく 栃木奥田正直

なるこ

秋風に門田のたり穂波たちてひかぬなるこに雀おとろく

擣衣

山里の静けき宿に旅寝してめつらしくきく小夜きぬた哉 愛知内田清

秋人事

鳴く蟲の聲さゝながら月の夜を俵あむなり小田のさと人 山口西村常子

山口

稲刈りのつかれ忘れて里人は灯火かこみ柿の皮むく 山口伊藤勘治郎

落 髪

髪すけは櫛にからまる落髮のそゝろ淋しく秋は深めり 愛知富田定子

二百十日

氣つかいし秋のあれ日の空はれて祝ふは里に限らさりけり 福島安藤孝寛

秋遠峰

秋たけて越の遠山藍よりも青きあり又雪つむもあり 石川森雅枝子

獨 酌

楽しみのつきぬこの世になからひて獨りくむ酒味のよき哉 朝鮮岡壽作

燕の雛

岡野覺太郎

生ひたちて歸りゆくともひな燕またたつねこよ軒の古巢を

蘆花

兵庫前田勝子

秋ふかみふさくる風の身にしみて入江淋しくあしの花ちる

秋海村

岩手菊池萬陸

秋たけてしほ風寒きあしたにも海原遠く出つる釣ふね

稻穂

東京齊田隆治

追はれてもまた歸りきて群雀小田の稻穂をはなれさりけり

岩手宮澤彌次郎

厄日をも事なく過ぎて千町田にしける稻穂のゆたかなる哉

山口横田榮忠

なつひてり實らぬものと思ひしに穂波ゆたけき秋の千町田

愛知諸角友平

群雀むれゐる方をおふかこと弓さしむけてたつかし哉

村人

京都山本貞子

新米にはたの里芋ほりそへて小作村人おとつれにけり

愛知土川順子

たけかりの獲物にあまる獲物なり麓の里に栗をひろひて

愛知服部桂

からす鳴く聲きこゆなり木守の一つのこれる山かけの庭

富山長原茂次郎

幼児の手のとくくまで柿の實の枝たわみけりせとの畑に

三重藤井鐵城

木の實よし木の子またよし世の秋の味は山家の人そしめける

東京齋藤房次郎

小山田は年の實りに恵まれてあしたの煙たちそはる哉

福岡村上福次郎

聲高く賜そなくなる日は西に傾く里の棕の木末に

秋 旅

茨城 林

龍

夏やせをいやすも樂し箱根路や紅葉の頃の七湯めぐりに

同 長岡純一郎

歌に繪にかきをさめつゝ家つとの荷かさなしたる紅葉見の旅

山梨 蘆澤直作

作

ともし火の光ほの見ゆ蟲の聲しけき桑畑中にへたてゝ

籬

愛媛 小野國三郎

郎

御所柿の色つきしより里の子にまた破らるゝ庭の竹垣

貧民窟

東京 篠田時化雄

雄

日かせきの人の群居るやれ長屋たかみやひにか朝顔の咲く

新米

朝鮮 野村安昭

昭

八東穂の實りゆたけき新米をまつ奉る神のひろまへ

秋祭

東京 小林富次

次

人浪はうつまきにけり都路に秋のまつりのみこし渡りて

梁

新潟 太田治之

治之

網の目も針ものかれて下り鮎やなにかゝるか哀れなりけり

秋落葉

兵庫 堀場鍊吉

鍊吉

夜嵐の吹きすさひたる跡ならん今朝は落葉の庭に散りしく

田舎垣

佐賀 坂元柳子

柳子

つる草のはひまつはれる竹垣ににひわらほせり小山田の家

葡萄

北海道 仙田登太郎

登太郎

北のしま秋ふけねとも朝毎に葡萄畑に霜のおくみゆ

秋柳

愛知 石原榮子

榮子

つり人のかけとたのみし里川の柳の下葉色つきにけり

秋夢

岡山 大塚義男

義男

力なき蝶にも似たる身の秋をしりぬる夜半の夢そ悲しき

秋の歌

石川 池田美枝子

美枝子

花すゝきなひかせて吹く秋風にむかこほるゝ山蔭の道

秋日城和にて

愛知神

田久吉

かくれ家を求めたまひし古をしのふ笠置に時雨ふりさぬ

秋山寺

新鴻江

部貞子

ちのみのうみてこぼるゝ山寺の庭に淋しく夕日さすなり

草花

滋賀津

田静江

七草の外なる花も咲きいてゝ色美しく野邊をかさりぬ

岡山室

多美子

咲匂ふ千草もあれと樂しきは我つちかひしコスモスの花

福岡梅

田八重子

釣たるゝ里の小川の片岸にささこそ匂へ赤蓼のはな

同今

井三郎

八千草の花とりゝに咲く見れば秋は野守そらやまれける

兵庫菅

村武救

秋の野は名もなき草の花さへにひと目惹くへく咲きそ競へる

はひこりて思ひのまゝに咲きにけり古井のもとの大蓼の花

庭草花

栃木田

村家壽子

つきゝに千草の花の咲いてゝ日毎に變る庭のちもむき

秋草

秋田藤

井重彬

八千草のきそひて咲ける花見れば七草のみといはれさりけり

千葉關

野義三郎

蟲の音もたえて淋しき秋草に曉寒くうつら鳴くなり

愛知山

本萬太郎

咲き匂ふ千草の花にかこまれて秋はうれしき野邊の我いほ

長野野

西野入貞一

八千草の花さき匂ふあさちふの露ふみわくる朝を樂しき

静岡岡

室伏良泰

心地よき秋の廣野に遊ひつゝ千草手折りて家つとにする

秋之部

千草花

三重 伴

こと子

うゑあきし庭の千草の中になほとつくにふりのコスモスも良し

北海道 關

源右衛門

うつし植し庭の秋草花さきて錦の小切れ見る心地せり

秋の七草

山口 大

田清子

名もしらぬ千草八千種しけりあひていつれの花か秋の七草

初秋風

愛媛 石

丸菅郷

薬うる旅商人のあかつきしゆたかに輕き秋の初かせ

秋風

東京 古

田邦子

あつまやの道にたわみて露にふす萩を起して秋風のふく

秋風

千葉 仲

田國太郎

茜さす夕日は岡にかたむきてまくつか原に秋風そふく

秋風

同 小

川縫子

うら木戸のへちまの柵のひろ葉ふく風も冷き音にかはりぬ

東京 鱗原 泰全

蝸のせはしけに鳴く山里の夕淋しく秋風のふく

大阪 三宅 淑惠子

打つゝく山田の稻に波たちて風もかをれる田舎道かな

富山 室崎 規子

萩桔梗さく野に交るくすの葉をうら返しふく秋の初風

岐阜 山岸 田鶴子

穂にいてゝ招くすゝきに秋風も目に見えにけり小野の篠原

静岡 森井 良太郎

うすくこく染むる紅葉に音たてゝゆくへも匂ふ山の秋風

岩手 齋藤 忠兵衛

秋風に木の葉ちりしく山里は住みなれし身も淋しかりけり

石川 渡邊 初雄子

なすひうる女もて來しほゝつきの色なつかしき秋の初風

水きはに障子を洗ふ人見えて里川寒く秋の風ふく 静岡 小薬勢伊子

はしり穂の見ゆるわせ田に波立てし心地よく吹く秋の夕風 同 菅沼愛子

鈴蟲の聲もゆらきてきこゆなり尾花波よる野邊の秋風 茨城 鈴木虎雄

琴さしの松見あくれば嵐山しらへをそへて秋風のふく 京都 福井とよ子

はせつりの人の群かる川口に浪ふきよする風そ身にしむ 鳥取 安江嘉千雄

幼子のよるのふすまをそへにけりねやもる秋の風のひゆれは 福岡 山川敬行

柿の實をあさるかけすのむな毛吹く風の心も冷かにして 群馬 馬剣持とう子

秋朝風 東京 川村ひら子

朝顔の小さくなりて咲く庭にはたさむきまで秋の風ふく

秋風寒 同 中山榮太郎

蟲はみしほつきの實の色あせて秋風寒しあさちふの庭

月前風 大阪 殿村たけ子

大空は風やふくらむ月になくかりをかすめて白雲のとふ

秋田風 埼玉 中村近藏

かりあとの山田にさきの立つ見えてみのけ寒けに秋風の吹く

畑秋風 朝鮮 岡字輔

新しきかゝしのたてる山はたに唐黍ゆれて秋風のふく

荻の葉風 千葉 筒井貞子

支那の野の我はらからを思ひねの夢おとろかす荻の上風

磯秋風 東京 川畑徹志

濱荻の上吹きすきて磯さきの松にうつれり秋の夕風

山寺秋風

鹿の聲風のまに／＼きこえて夕かけ淋し秋の山寺 愛知 石川 たま子

秋山

夕日かけかゝやく雲に色そひて紅葉まはゆき秋の山の端 福島 五井 珍雄

暮秋山

秋は早くれて行くらむ遠近の山に紅葉の名残りといめて 熊本 堤 光次郎

秋山家

秋くれは我山住もいそかしき紅葉みる人きの子取る人 栃木 濱 中章七郎

山家柿

影さむき秋の夕日はうつろひて柿の實赤し八女の山里 福岡 宮崎 眞樹子

山畑

松原につ／＼山畑雪のことわたの花さきそはの花さく 山口 木部 連

秋川

岸にさく千草うつして里川の水も一入すみ渡るなり 岡山 江原 彌恵治

秋川水

吹く風に驚くいなことひそれて流れゆく見ゆ小田のくさ川 愛媛 前谷 喜久子

秋夜讀書

なかきこそ嬉しかりかれ秋の夜は心ゆくまで文もよみ得て 東京 川畑 徹志

月前思

人毎に思は千々に分るらん同じ雲居の月をなかめて 栃木 村田 雄治郎

月前薄

八千草の花の月をしのすき我物顔に一人しめたる 岡山 河田 楓舟

濱早秋

立つ波のうねりもそひて鹿島浦なきさに早き秋の初風 茨城 内川 照司

立秋

山畑の唐もろこしの枯葉ふく風冷やかに秋たちにつけり 愛媛 長井 うちた子

桐の葉の風に散りくる音のして秋の夕へそことに淋しき

桐の葉の風に散りくる音のして秋の夕へそことに淋しき 東京 飯高 宗子

秋 曉

したしみし風の心に秋の來て曉おきのはた寒きかな 山口 波多野つた子

初秋朝

朝風に葉末に宿る露ちりて鳴く蟲の音もやみてける哉 廣島 牧本了之介

霧深き谷間に百舌のたか鳴きて山のいて湯の朝のしつけさ 長野 細田 豪興

秋の夕日

水かれて片瀬ひわるゝ里川の穂蓼の花にあきつとまれる 宮城 荒祐次郎

秋 夕

粟はみなかりつくされて山畑にかけすそきなく秋の夕くれ 群馬 富岡 糸子

カマニの葉はら／＼とちる海の邊に夕への迫る秋を淋しき 布哇 丸谷 秀岳

何となく人の戀しきゆふへかな我宿のみの秋ならねとも 東京 山岸 静江

秋 夜

月影をふみてゆきかふ人々に蟲の音やみぬわか草の山 奈良 石橋 亦夫

秋の夜の机をてらすともし火に蟲ときそひて我も歌よむ 大阪 片岡 作太郎

秋 庭

蟲の聲おとろふ庭にてる月の影さへほそる秋の末かな 富山 米林 徳次郎

七 夕

ひとしせの長き月日を星合は今宵はかりとたと定めけむ 埼玉 桑田 良隆

星祭ることひなりしを心なく天の河原に秋雨そふる 宮城 村上 正路

秋 夜 夢

小夜ふけて軒はの萩の上風にさめたる夢のあとの淋しさ 廣島 山下 攝之助

夜 雲

月見にとまねきし友もおとつれす雨もつ雲の空をおほひて 東京 佐藤 林次

尾花

福島慶

徳政子

山の庵はとふ人もなし今日もまた門邊の尾花友まねけとも

雨後庭

和歌山 稻垣

治

秋しくれ一ときはれて静かなり庭のコスモス露おもけにて

天河

福岡 岡澤

麟太郎

古城の松のかなたに薄きぬのたなひくかこと天の川見ゆ

秋の歌の中に

東京 大町

五城

茸かりにちきりし日より降りいてゝ惜き樂みあめに流しつ

冬之部

晴雪

東京 千葉

胤明

都のみつもりて晴れし雪ならむちゝふ山なみうすみとりなり

松上雪

同 鳥野

幸次

雪ふかみみとりも見えず朝日影小松か原にさしわたれとも

落葉

同 武島

又次郎

散るものもなしと見えたる梢より又はく許りふる木の葉哉

遠山雪

同 遠山

英一

豊かなる田中の里の朝けふりなひく野末に雪の山見ゆ

夜霰

同 金子

元臣

夜もすからかなちつくらふよほろらの灯火なひけ霰たはしる

新年松

同 加藤

義清

松もけさ年を迎へて初風にまつ大御代の千代うたふらむ

薄氷

同 外山

且正

たちいてゝ老たる人の見る頃は影もとゝめぬ池のうすらひ

初霜

同 千早

正善

有明の月の光のそのまゝに残るとみしは初霜にして

みそさゝい飛ひかふそその芝草の上にも結ふ今朝の初霜

廣島 重政

清子

くみあくる水はなか／＼あた／＼けき井けたに白しけさの初霜
兵庫竹本をつた

堆く積み捨てられし靱殻に初霜おけり里の畑中
富山中川幸作

我が宿の門田に積みし藁つかの真白にみゆるけさの初霜
山口熊野潤教

庭初霜
愛知土川順子

あまりにも曉方の寒かりしかせを見せたる庭の初霜
静岡伊藤日榮

鐵道の霜にた／＼さす朝日子の影さへさむく見え渡る哉
千葉鎌形治夫

立つ駒の背こしに不二の山みえて朝霜しろし總の牧原
島根渡部周太郎

冴え渡る月の光りにこほりけむおはしましろし今朝の初霜

から／＼とこほれおちたる桐のみに今朝ほの白く霜の置きたる
東京春永達子

八街の市のまかね路霜見えてはたふる人の影寒けなり
鹿兒島牧元竹次

うめもとき色つく庭の垣根道朝風さむく霜ましろなり
兵庫竹内方山

道芝のそれともわかすおしなへて真白に置ける今朝の霜哉
宮城加藤東助

霜深
鹿兒島伊集院省三

真ひるさへ落葉の下の霜柱たちしま／＼なり山蔭の道
福岡村上福次郎

里人のすてし草鞋の上しろく霜こほりけり野邊のほそ道
兵庫木谷壽子

枯野霜
枯野霜

蟲の音も千草もかれて霜しろきをの／＼しの原訪ふ人もなし

野邊見れはうつろひはてし百草にねく霜白き朝ぼらけ哉 千葉 稻垣 治

朝つく日さしいてぬまを命にて枯野の草に霜の花さく 秋田 柴田 金治郎

行路霜 福岡 十時 吉男

朝またき野路わけ行けはかりてほす晩稻の東に霜を見えける 東京 田中 千秋

山道にきこりのをちかぬきすてしわらち真白に霜のおきたる 東京 福田 喜代子

畑つもの市にはこへる小車のあとさやかなり霜の里道 山梨 中村 是則

朝日さす代々木の神の詣て道見るからさむし霜しろくして 熊本 江上 信恵子

御手洗の水はこぼりて廣前に真白くおけるけさの霜かな

踏霜 島根 長崎 仁子

霜柱ふめは音してくつれけり八ツ手花さく庭の垣根に 同 平井 常四郎

霜凍る道かよひ行く學ひ子をよそに見るすら寒き朝かな 秋田 今井 操

三井寺の鐘のきこゆる曉におく霜しろし瀬田の長橋 千葉 沼澤 義信

霜置けるわらやの軒に居ならひて雀さやく朝ぼらけ哉 千葉 長谷川 泰治

朝汽車のいまた通はぬまかなちに寒さを見せて霜の光れる 岡山 柚木 夢想

霜白きやくらに風の音さえてつくはや鐘のすこき夜半かな 宮城 多田 捨己

いつかたのちまたに火の手あかるらむ霜夜にさゆる早鐘の聲

兵庫 佃 幸子
つこもりの一夜の鐘に老かみも頭の霜やおきそはるらむ

福岡 津崎 田鶴

柿の實をあさる鴉の聲さえて岡の一つ家霜ましろなり

奈良 瓦片 山 やす子

まつ友のこぬまにきえぬ敷松葉かくさぬ程の今朝の初雪

山梨 腰 卷 豊 丸

人やこん歌やよまんと思ふ間にはやも消えぬる庭の初雪

愛知 内田 清

初氷また結はねとけさ見れば伊吹の峰に雪そふりける

大阪 岩井 健之丞

さはかりはたまらぬ今朝の初雪も重けに見ゆる庭の吳竹

群馬 羽鳥 榮治郎

冬はまたあさまの岳にめつらしくふり積りたるけさの初雪

岩手 宮澤 善次
枝うつる小鳥もいかに寒むからん今朝ふりそめし庭の初雪

埼玉 須藤 常章

武蔵野は霜たにおかぬぬくき日に甲斐の遠山雪を見えける

愛媛 佐藤 義道

初雪に君のみなやみいかにそと葉山の方を拜む今朝かな

和歌山 田村 和夫

和歌の浦たてつらねたる海苔粗朶の枝の上白く初雪のふる

群馬 伏島 たき子

スキトする若き人等やいさむらん初雪白し赤倉の山

新潟 江部 大作

千鳥なく野川の渡し風さえてかれあし白く雪ふりにけり

千葉 仲田 國太郎

降りつもる雪の重みにたえかねて道をさへさる背戸の竹むら

くろかねの道ゆく車とまるまで降り積もりけり越の白雪
大阪 巨摩 峰 春

したゝかに雪を積もれる此あした里のわら家の煙のこして
同 上 島 松 之 助

西比利亚の荒野につもる白雪も朝日の影にとけそめにけり
佐 賀 平 野 良 道

たけ狩に行きしかなたの山のねに今朝は早くも見ゆるしら雪
北海道 仙 田 登 太 郎

里にふるあめに寒さのくはしりて高嶺は白く雪をつもれる
宮 崎 竹 井 一 郎

大川のなかれ一筋あらはれて廣野ましろに雪をつもれる
鹿 兒 島 津 留 武 彦

井戸の邊に米とく妹の前たれのけかれ目にたつ雪の朝哉
福 岡 淺 村 信 作

學ひやに通ふわか子のなかくつも短かくつもる今朝の雪哉
宮 城 塚 本 梅 次 郎

めつらしく降りつもりたる白雪に我が庭としも見えぬ今朝かな
大 阪 中 濱 富 三 部

松の内の都をよそに學ひ子は雪の山邊にスキをそする
京 都 井 關 永 成

ふりつもる雪に心もあちつきて長閑にすこす松の内哉
群 馬 萩 原 和 一 郎

新玉の年たつけふの天地を朝きよめして雪の晴れたる
東 京 池 田 孝 治

ほからかに大路は明けぬ門松は初日かやく雪をかさして
靜 岡 山 崎 六 女 子

九重のとのゐの衛士や寒むからむみかとかはらの曉の雪
東 京 紫 芝 澤 子

曉山雪

廣島

研野熊次郎

小松山ときはの色もうつもれて見渡し白き雪のあけほの

熊本

田上今太郎

ほのくくと明けゆく山を包みたる雪の光りの美しき哉

東京

柳下くら子

ほのくくと明けゆく空にたなはる雪の高嶺や何處なるらむ

千葉

本城己之助

村雀のきにとひきてうゑてなく聲哀れなる雪の朝かな

朝雪

福岡

中島雄太郎

隣りにも今朝はゆかれすなりにけり夜の中に深く雪の積りて

岩手

齋藤忠兵衛

ふる雪にとちこめられて熊のこと春をまつなり山の一家

秋田

早坂節子

ひるもなほ日かけ見ぬまで軒高く雪ふりつもる出羽の山里

社頭雪

神奈川

浅井はな子

朝日かけ雪にかやく廣前は我も神代にたつこちせり

大阪

片岡作太郎

わたらひの神風の吹く杉杜に積れる雪は見るもかしこし

山口

赤地幾五郎

吹く風も枝をならさてみつかきの松のしつをにつもる白雪

東京

川村むら子

ふる雪に色こそはゆれいなり山あけの鳥居も杉の木立も

福島

鈴木重義

大社きよのおほひて廣前はつもりもあへぬ今朝の雪かな

兵庫

太田富子

柘の一葉くにとまるまで雪こそつもれ賀茂の神垣

福岡

今井三郎

みあかしの光りうすれてほのくくと雪に明けゆくみ社の杜

豊なる年の貢とはらひとの神のい庭に積るしら雪 大分 溝口 康繼

みたらしの清水のこして御社に清くも雪のふりつもりたる 秋田 藤井 重彬

神さふるいかきの松もまさかきも雪のしらゆふかけて眩ゆし 宮城 和泉 丈三郎

神すきの木の間をもるゝみあかしの光り静かに積もる雪哉 岡山 山内 田久太郎

うけら火に雪はしつれてをとこ山かた枝みとりの松もみえけり 三重 岡玄道

廣前にぬかつくさまに神垣の松こそたわめ雪のつもりて 宮城 白幡 清一

雪はれてみ濠の松に朝日さし光りのとけき大内の山 東京 浅田 近子

晴雪

廣島 小田 勝次

和田の原積りし雪を朝晴れのいつきしまねの松に見る哉

同 山下 攝之助

心地よく瀬戸の鳥山雪はれてあまのつり舟二つ三つみゆ

富山 長原 茂次郎

雪に伏す竹はつきく起きそめぬ朝日てりそふ庭のまかさね

千葉 北田 甚之助

しつのもも今日をよき日と洗ひきぬ急きてほせり雪はれの朝

山形 伊藤 忠夫

きのふより降りつゝさつる雪やみて裾野も白し朝の月山

東京 鈴木 隆之助

雪に伏す窓の吳竹はねかへる力の見えて空そはれゆく

山形 小野 仁堂

埒よりたちしからすの群はかりくまになりたる雪の朝はれ

朝晴雪

竹は伏し松はあきぬる朝庭の雪の光りにはるゝ空かな

暮雪

スキもつ人そよりくる山形の五色の里の雪の夕くれ

朝またき降り出したるむつの花夕暮かけて深くつもりぬ

更けゆかはいかに積らむ風なきてあやめもわかす雪に暮ゆく

木枯に夕陽はちちて入相の鐘の音さむく雪のふりくる

暮村雪

ふきすさふ北山あろし静まりてふもとの里は雪にくれゆく

夕暮雪

さたかには人影たにもわかぬかな雪ふりしまく夕暮のみち

佐賀中野萬龜子

山形三浦貞啓

岡山江原彌恵治

愛媛長井うた子

和歌山稻垣治

福島五井珍雄

愛知富田定子

庭雪

雪見にとうなかす友の文使ひはひりに跡をつけてきにけり

夜雪

下駄をうつ聲しきりなり宵の間の雪はいよゝ深くなりけむ

月前雪

雪ふかみ大路ゆきかふ人もなし晝に變らぬ月夜なれとも

夜雪寒

買物の重荷もあるに日はくれてふく風寒く雪ふりいてぬ

歸りこし父の上着に氷りつく雪見るたにも寒き夜半かな

夜嵐の音をうつみてふる雪はなかゝ寒し火桶かこめと

夕雪

さえゝし風にしまきし雨の音やみし軒はは雪となりなさ

三重荒木田泰園

同松島叶

鹿兒島松山資幸

富山沼田雪子

東京板倉綾羽

佐賀稻葉誠月

岡山駒井縫次

若草山雪

奈良 葛城

千種

ふもとへに忍あさる鹿も寒けなりはたれ雪ふる若草の山

宮城 馬淵

誠敬

ますらをか軍ならしにいさみゆく雪の山道嵐ふさたつ

同 村上

正路

明けくれに我目になれし山々もよその心地す雪のあしたは

同 早川

京子

ふきあれし嵐はやみて青葉山作並かけて雪ましろなり

連山雪

北海道 井上

近藏

火の山の煙はたえすのほれとも連る峰は雪ましろなり

兵庫 堀見

雅信

まかしく御代の光りを朝日さす遠山の端の雪に見る哉

長崎 阿比留

敬助

波を出つる旭に雪の色はえて空にかしくやくをちの鳥山

をちかたの高根さやかにみゆるかないたしく白く雪の積りて
 東京 齋藤房次郎
 茨城 林龍
 都人花となかめてうたふめり雪のあしたの秩父甲斐嶺
 岩手 清水文四郎
 よひの雨雪となりけん今朝みれはいたしく白し岩手富士のね
 島根 松井鐵太郎
 老松の下枝こしに見えてけり遠山眉のけさの初雪
 北海道 深谷由井子
 雪積山
 いつとなく秋はくれけむふり積るしりへし山の嶺の白雪
 東京 佐藤秀助
 田家雪
 草川の水にかけたる水車廻らぬまてに雪そつもれる
 朝鮮 野村安昭
 繩をなひかます作りて田人らは雪のひと日を家にこもれり

街上吹雪

宮城國分義一郎

やちまたの吹雪はいつか治まりてこそ共なく月の汚えたる

風含雪

東京押田よの子

松のはに積りあまりてしつれちる雪ふく風の寒き朝かな

雪中眺望

石川櫻井貞

白雪のふりつむ山の枯木さへ花と見る程あたけくして

海邊雪

山口伊藤勘治郎

小夜千鳥なくね亂してふり積し雪を見せたる磯の松原

馬上雪

岩手鈴木小七郎

荷をはこふ馬の背いよ重からむ一足ことに雪はつもりて

たて髪はつらゝ結ひてのる駒の嘶高し雪の蒙古路

福岡天野開作

雪中獸

新潟大谷徳兵衛

狩人のねらひはそれて雪の上まろふか如く兎にけゆく

寄雪祝

北海道中原作太郎

あまそゝる富士の高嶺に千代をへし雪こそ民の心なりけれ

帶雪寒

東京篠田時化雄

稻はみな刈り拂はれて只ひとり残る案山子の雪をおひたる

雪中閑談

愛知邊渡覺則

ふる雪にとちこめられて老の身の孫とかたるも樂しみにこそ

吹雪

北海道石田昌勝

あかときの空の光りもしはしにてふきうつまくいふり國山

大空はちり雲もなくはれなから吹雪にくもる富士のいたゝき

東京藤崎虎二

歳暮雪

兵庫藤井ちた子

こん年の道を開かむ柴かきの内外うつむる雪をはらひて

雪降る日

東京佐藤林次

雪ふりて納豆うる子の聲さむし人もつめたき心もつ日に

雪中後

同

清水繁子

嵐山カメラの中のあるしともしらてやくたす雪の後士

雪中待友

神奈川 馬

渡増子

ふりつもる雪をうたけのもてなしに歌の友達けふは招きつ

旭照雪野

兵庫 庫長

谷川翠生

ふり積る雪に旭の照りそひて野は白金のうてななりけり

雪中松

東京 山

岸静江

少女子かしほあみ衣かけたりし磯の小松に雪を積れる

観雪

福岡 宮

崎真樹子

大川のさしの一家うつもれて水のみくろし今朝の白雪

松上雪

愛知 三

井惟雄

けさ見れば庭の老松音もなく風をうつみて積る雪哉

宮城

早川

ちやう子

しらゆきに松のみとりはかくれても高き操はかくれさりけり

雪埋松

東京 宮

坂武雄

ふり積る雪にみながらうもれても松にはまつ影そみえける

雪たるま

茨城 打

越寅吉

大路ゆく人をにらみて寒さをも知らぬ顔なる雪たるま哉

雪中探梅

三重 堤

元道

いつ方にさきいてぬらむ雪深き野路の朝かせ梅か香そする

竹林雪

京都 安

田ゆか

朝日かけさす方よりそ起返る雪に伏したる窓の竹むら

雪中竹

福島 渡

邊千秋

ふり積る雪にたわめとはね返し折るゝと見えて折れぬ竹むら

山村雪

栃木 奥

田正直

ふく風にしつれては又つむ雪にあきふししけき庭の竹むら

山村雪

神奈川 平

準彌

立のほる煙のこして山里をふりうつみたるけふの雪哉